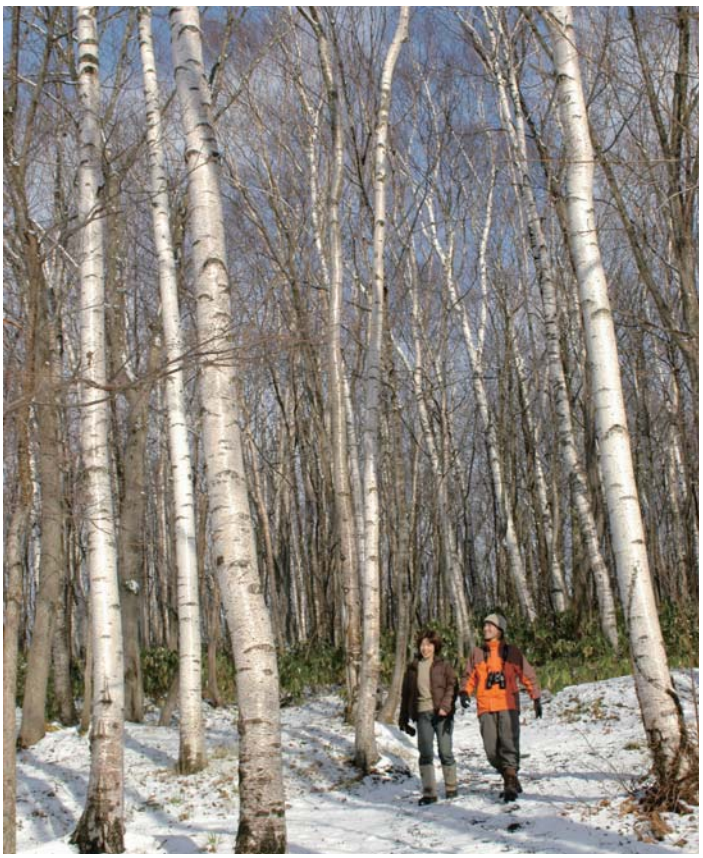
地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA 30

2006年
春夏号

特集 田舎と都市の新しいライフスタイル

交流居住時代



宝くじ 本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

田舎と都市の新しいライフスタイル
「交流居住」時代
●特集企画に寄せて

「カフェ森風」で見つけた手作り人形

週末には豊かな自然の中でのんびり過ごしたい、小さな畑で農薬を使わない新鮮な野菜を栽培してみたい、釣りやハイキングを楽しみたい―都市に住む人の多くはそんなことをふと思ったりしている。特に子どもを持つ親や定年間近な中高年、リタイアした人は田舎へ行ってみたい、田舎暮らしを始めたいと思っている。

しかし思っているだけで、現実に田舎暮らしを決断するところまではいかない。理想的な場所や住まいに出会えるのか、田舎へ行って仕事はあるのか、高校や大学へ行っている子ども達は、今の住居はどうするか、もし病気になったら―等々考えて躊躇してしまう。

この場合の「田舎暮らし」とは、都市の生活を切り上げて田舎に土地や家を買い、仕事も含めて移住するという従来型の方法で、田舎暮らしに憧れていても、それを実行する人は限られていた。

そこでお勧めしたいのが、現状を維持しながら、もっと気楽に田舎と都市を行き来する方法。つまりライフスタイルに応じて“ちょっとだけ田舎暮らし（観光・交流型）をしたり、のんびり、どっぷり“田舎暮らし（滞在型、生活型）をしたりする方法で、本誌では“これを「交流居住」と表現することにした。

「交流居住」とは、都市住民が都市と田舎に滞在拠点を持ち、双方を仕事や余暇で使い分け、地元の人たちと交流を楽しみながら生活する新しいライフスタイルのことをいい、総務省過疎対策室では、過疎地域の自立・活性化対策の一つとして「交流を主たる目的として田舎と都市を行き来するライフスタイル＝交流居住」を提案している。これは人口の減少や高齢化で悩む地方が元気を出すための施策であると共に、都市住民にとってもより豊かな生活を実現する場、自己実現の場など多様な居住スタイルを実現する場として重要な意義を持っている。特にこれからは団塊の世代といわれる大勢の人々が定年を迎える。長い長い老後をどのように自分らしく健康で充実して生きていくかが課題で、「田舎暮らしがしたい」「ときどき田舎暮らしがしたい」と思っている人が6割以上を占めている。

総務省過疎対策室の提案によれば、交流居住には4つのタイプがある。

1「ちょっとだけ田舎暮らし」―田舎で観光・交流型

レクリエーションや自然・生活体験、田舎の人々との交流を目的に、お気に入りの田舎を年数回訪ねて日帰り～2泊程度滞在する。全国各地の市町村がこの種の体験ツアーを開催しており、公共の宿泊施設やペンション、民宿が利用できる。

2「少しじっくり田舎暮らし」―田舎で研修・就業型

技術研修や仕事のため一定期間田舎に暮らすタイプで、滞在期間は数週間から3ヵ月程度で、研修施設と宿泊所がセットになっている場合が多い。田舎暮らしをめざす若い世代の活用が多いが、最近は定年後に農業をしたいと研修を受け、農家へ就労する50～60代の人も増えている。

3「ゆっくりのんびり田舎暮らし」―田舎で滞在型

仕事や教育等の関係で都市に暮らしているが、週末や夏休み等には田舎で暮らすタイプで、いま人気のクラインガルテン（滞在型市民農園）、別荘、リゾートホテルを活用。最近は戸建て持家でなく、気軽に利用できる貸し農家、レンタル民家等も登場している。

4「どっぷり田舎知らし」―田舎で生活型

仕事も生活の場も田舎に置き、用事のある時に都市へでかけるタイプで、都市へ行く頻度の高い人は、都市にセカンドハウスを持つケースもある。2、3型を経て田舎に定住し、農業や林業、木工等の仕事に従事しながら民家を購入改装またはお気に入りの場所にマイホームを作る人も多く、地元は定住する人に各種の支援策を用意している。

「でぽら」では、交流居住している人たちを現地（田舎）へ訪ね取材させていただいた。田舎暮らしへの熱い思いを実現するために「交流居住」を経て定住した人たち、週末には必ず田舎で家庭菜園や趣“味生活を楽しんでいる人たち、”田舎暮らし準備中“の人たち、技術を身につけたいと脱サラして木工、農業、酪農等を研修中の若者たち等々。

皆、なんと素敵な顔をしているのだろう。

今年は例年にない寒波と豪雪で、北海道や北陸は大変苦労している。取材を予定していた新潟県高柳町では早朝から夜半まで除雪に追われており、取材を遠慮させてもらった。「雪が2mを超えて家の中は真っ暗、でもスキーで通勤出来て楽しいの」とニセコで取材した女性は電話口で元気に語っていた。

早く春が来ますように―。

「でぽら」編集部
財団法人過疎地域問題調査会

野良作業する福山さん夫妻

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

DePOLA（でぽら）

NO.30

●もくじ

田舎と都市の新しいライフスタイル――［交流居住］時代

●特集企画に寄せて――2

家の中は草木がいっぱい（都路・柿崎さん）

■自然とムラの人々に魅せられて

・廃校に緑と風と人が憩う
［森と風のがっこう］（岩手県葛巻町上外川）――4

・元気な牛たちを育てる
［くずまき高原牧場］で研修（岩手県葛巻町葛巻）――7

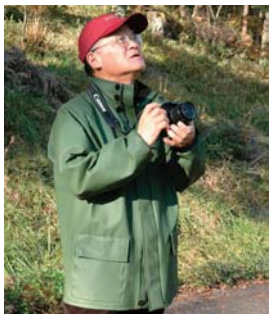
・都会からの移住者を地元でサポート
町と移住者の仲介役、㈱都路林産開発
（福島県田村市都路町）――9

■田舎でもう一つの生活を楽しむ

・土に触れ、星を眺め、山野を歩く
週末は“自然と神話の里”でリフレッシュ（奈良県曽爾村）――12

・別荘暮らしで始まった、もう一つの人生
八ヶ岳山麓・松原高原別荘地（長野県小海町）――16

・都市交流事業は地元住民主体で
2地区に滞在型市民農園（クラインガルテン）
（宮城県丸森町）――19


八ヶ岳山麓の散策を楽しむ有山さん

■自然とムラの人々に魅せられて
●ニセコの大自然に抱かれて

・スキーの聖地でインストラクター 矢吹さん夫妻
（北海道ニセコ町／倶知安町）――22

・石釜でこだわりのパンを焼く［JIN］神さん夫妻
（北海道真狩村）――24

丸森町・不動尊クラインガルテン

・椅子や机の知的家具で甦った廃校
二人の木工家が探し求めた夢の工房［湯ノ里デスク］（北海道蘭越町）――26

廃校は夢の木工房「湯ノ里デスク」

●和歌山県へ交流居住

・カヌーを通じて本格的田舎暮らしへ
移住に向けて準備中　福山さん夫妻
（和歌山県日高川町中津）――28

・山のてっぺんに理想郷を作る
田舎大好き母さんの挑戦　福島妙子さんと仲間達
（和歌山県美里町）――30

技術を身につけて田舎暮らしの準備

・木工芸家をめざして木曽へ居住
上松技術専門校で学ぶ若者たち（長野県上松町）――32

・農家で農業を研修する（和歌山県日高川町中津）――34

INFORMATION　各地のクラインガルテン　35　17年度DVD完成！　奥付　35

「でぽら」とは――

Depopulated Local Authorities（人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体）からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいますが、国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」（でぽら）を発行しています。

表紙●写真

●表紙写真　左上／クラインガルテン曽爾で家庭菜園を楽しむ増田さん、上は田中未来ちゃん
左下／都路にセカンドハウスを建て週末利用する鈴木さん夫妻
右上／エコスクール「森と風のがっこう」（葛巻町）
右下／ニセコの白樺林を歩く矢吹さん夫妻

▶右が「カフェ森風」。奥は廃校になった旧小屋瀬上外川分校

廃校に緑と風と人が憩う「森と風のがっこう」

（岩手県葛巻町上外川）

北上山系の雄大な自然の中で元気に育つ牛たちがいる東北一の酪農郷、葛巻町。牧場には土づくりから育牛、乳製品製造等を学びたいと各地から若者が研修に訪れる。

一方、町の中程にある山間集落では廃校となった分校を活用してエコスクール「森と風のがっこう」が開校した。建設と運営に当たるのは、上外川の自然や風土に惚れてやって来た都会の人たち。子ども達への夢を托した学校“は、地域の人々の支援を受けて活気を取り戻している。

●廃校を活用して新エコライフの拠点に

葛巻町の真ん中を走る国道281号線からそれて10kmほど高原を走ると、上外川集落になる。上外川地区の高原牧場には高さ100mの風力発電機が12基完成し、葛巻町はグリーンエネルギーの町としても注目されている。

上外川集落の入口にあるのが旧小屋瀬小中学校上外川分校で、秋には紅葉が美しい広葉樹林を背景に平屋建て約250㎡の小さな木造校舎が現れた。校庭手前の道路脇にはブルーの車掌車一両が置かれ、隣接する畑では牛たちがのどかに草を食べている。まるで宮沢賢治の童話の世界に来たような雰囲気だ。

そんな中で目を惹くのが、校庭の一角に新設された「カフェ森風」という名前のユニークな建物。教職員住宅のあった場所に、地域の木材や土、廃材等を徹底的に再利用し、昔からの工法を駆使して建築したエコライフ施設で、1年間の建設工事を経て、昨年4月30日にオープンした。土日はレストラン、喫茶店として営業する他、自然環境に関心ある人々の会合、地域の子どもたちの各種行事、地区住民の憩いの場として活用されている。

上外川集落は北上山地の山麓にあり、現在11世帯の酪農家がある。分校は平成8年に廃校になったが、地域の子どもたちがしっかり学び逞しく育って欲しいという思いから校舎はそのまま保存されてきた。

5年前、ここを訪れて、自然と風土、可愛

車掌車と内部。今は椅子とテーブルが置かれ交流の場に

自然とムラの人々に魅せられて

い木造校舎に注目した人がいた。

「森と風のがっこう」を運営する「岩手子ども研究所」の代表、吉成信夫さん（49）。宮沢賢治の世界に惹かれて東京から岩手県に移り住み、県立児童館いわての館長に就任するかたわら、各地に相次ぐ廃校を再利用出来ないかと考えて来た。その吉成さんを惹き付けたのが上外川分校と入口に設置されたブルーの車掌車だった。旧国鉄が廃線で放出した列車を、地区の人たちが子どもの遊び場にと買い求めたもので、中は子どもたちの図書室として活用され、机や椅子が置かれている。吉成さんが地区の親達の子ども教育への熱意に心打たれると共に、宮沢賢治の『銀河鉄道』をイメージしたのはいうまでもない。

岩手のエコロジカルな暮らしの中にこそ「学びの場」と「心の居場所」があるのではないか、子ども達の未来のために、廃校を利用して新しい"学校"を作ろうという吉成さんの提案に、地区の人も町も大賛成、建築家や環境問題に関心のある学生たちがボランティアで参加して、校舎のリニューアルとエコライフスクール「カフェ森風」の建築がはじまった。

壁は皮を剥いだ30㎝の捨て間伐材の丸太を土で固めて積み上げたもので、タタキはコンクリートではなく、藁に石炭、粘土に川砂を組み合わせた伝統的な工法。梁やガラスも農家の廃材を利用、天井には干し草を、地下には炭を断熱用に入れ、屋根には土を入れてソバや麦を栽培している。もちろん雨水タンクや太陽光パネル、風車等の自然を活用した設備も完備している。

ピカピカに磨き上げられた校舎は生き生きと甦り、トイレや風呂等の一部にエコロジーな改良が加えられた。地域の歩みや子どもたちの作品も展示され、誰でも自由に出入りできるようになっている。

●「カフェ森風」で夢を育む

訪ねた日は荒れ模様の天候だったが、「カ

▼カフェ森風の建物。屋根の上には畑がある

▲森と風のがっこうとカフェを運営する黍原豊さんと吉成百合さん

▼店内には宮沢賢治をイメージする手作り玩具も。右は廃針金を利用して作った椅子

▶森風カフェのランチはクリームシチュー

▲盛岡からやって来た客たち

フェ森風」の広くて明るい店内の中央では暖炉の火が燃えて暖かい。鉄くずや廃材を利用して作ったという個性的なテーブルや椅子が並んでいる。店内には世界のエコロジーに関する本や宮沢賢治童話の世界を思わせる絵や人形等があり、静かに珈琲など飲んでいると窓の外を雲や風が流れていくのが感じられる雰囲気だ。

上外川分校内部廊下。分校や地域の歩み等を展示している

▲地元の老人が作ってくれた風見鶏

▼校舎脇の庭で放し飼いする鶏。朝一番の黍原さんの仕事

出迎えてくれたのは「森と風のがっこう」の実務を担当する黍原（きびはら）豊さん（28）とカフェの店長・吉成百合さん（49）。百合さんは吉成信夫さんの奥さんで、早速特製ランチを用意してくれた。じゃがいもとここで飼育している地鶏の肉などを牛乳・バターでじっくり煮込んだクリームシチュー。地元産の新鮮材料を使って手間ひまかけて作った家庭的料理で、大変おいしい。珈琲とシフォンケーキも名物で、「ケーキは地区長の奥さん（アイコさん）が焼いて来てくれる絶品なんです。とても感謝しています」と百合さんは言う。開店当時のゴールデンウイークには地区のお母さんが交替できて手作り料理を提供したという。

「東京から吉成について来て盛岡にいたんですが、葛巻に行くぞと言われて。最初は戸惑いましたが、とても素晴らしいところ。何かあれば地域の人たちが手伝いに来てくれるし子ども達も遊びにきてくれます。皆が寛ぎ共に夢を育んでいく場所でしょうか」という百合さんは、子どもや若者たちにとって気さくで逞しいお母さん的存在のようだ。

一方、黍原豊さんの毎日は、朝起きて校舎の脇で飼っている50羽の鶏に餌をやることから始まる。「森と風からの便り」の制作やスローツアーの企画、パソコン等の仕事のかたわら、春夏は野菜づくり、秋は山へ行って間伐材を集めて薪割りしたりと忙しい。

出身は愛知県の瀬戸市だが、農業や農村に関心があり大学は岩手大学農学部へ。学生の時に県内の山村へ足しげく出かけ、特にバッタリー村（山形村）で独自の山村文化にふれてから、山村に居住して村おこしなどを手伝いたいと思うようになった。昨年「カフェ森風」開設と共に職員として移住した。吉成校長は一戸町にある児童館まで通勤しているので、黍原さんは多忙だ。

「でも地域の人たちの暮らしの知恵や協力が大きな支えです。役場の職員の方々も支援してくれる大切な協力者です」

同校の建設や運営に当たっては、行政や地域からの助成金はゼロだが、多くの人々の善意によって成り立っていると黍原さんは言う。

数年前まではひっそりと無人だった廃校はいま年間３０００人が訪れるようになった。中には岩手大学学生の幸田直人君のように時々寝泊まりにきて黍原さんの仕事を手伝う若者もいる。彼は「自分をさらけだす自信がなくて人間関係で悩んでいたが、森と風のがっこうへ来て大自然や素直な子ども達と接するうちに、自分らしさを出せる安らぎの場所となった」と『森と風からの便り』の中で記し、目下は卒論を書きにここへ出かけてくるとのことだった。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

- 「森と風のがっこう」☎0195-66-0646
  http://5d.biglobe.ne.jp/~morikaze/

元気な牛たちを育てる「くずまき高原牧場」で研修（岩手県葛巻町葛巻）

研修生、古内和真さん。成牛と子牛の世話をしている

くずまき高原牧場は社団法人葛巻町畜産開発公社が運営する公共牧場としては日本一の規模を持つ牧場。昭和51年3月、今から30年前に設立され、酪農家から牛を預かり、元気に大きく育て妊娠牛で返すという乳牛雌哺育育成事業と黒毛和牛や羊を肥育して販売、食材として供給する肥育事業を行っている。他にチーズハウス、ミルクハウス、交流館「プラトー」、レストラン「袖山高原」他を経営し、町の経済と雇用を担っている。

5カ所に広大な牧草地を持ち、総面積は1,774ha。牛舎を含めて約3000頭が飼育され、従業員はパートを入れて110名になっている。

昭和55年より酪農家の後継者育成をめざして1年から3年間の長期宿泊研修生を受入れてきた。毎年8名を上限に受入れているが、最近は酪農家とは関係ないが農村や畜産に興味があるので働きたいという人が増えているという。

●将来は地元へ戻って酪農家のために

肥育課課長代理の上野豊治さんの案内で、研修生のひとり古内和真さん（19）を仕事中の牛舎に訪ねた。古内さんは大船渡市出身で、高校を卒業後2年間専門学校で学び、人工授精師としての資格を有している。今年は現在6名の研修生が採用され、フィリピンからも2名の若者が来て学んでいる。

「家でも数頭牛を飼っているので、牛は僕にとって友だちのような存在です。公社創立の頃父がここで事務職をしていましたので、父の推薦で入学しました。くずまき高原牧場は土づくりからこだわっており、牛たちは良質の草を食べて斜面の牧草地もよく動き回る丈夫な大きな牛に育ちます。共進会でも葛巻の牛は高い評価を受け、全国から子牛の飼育依頼が沢山きます」と古内さん。放牧は10月中旬頃に終り、牛舎に戻ったたくましい親牛たちの世話と隣接する施設の生後半年の子牛たちの飼育が古内さんたちの仕事。

研修生の近代的な宿泊棟は牧場本部近くにあるが、古内さんとフィリピンの研修生は牛舎の隣に建つ一戸建ての寮に住み、入浴と食事には研修棟へ出かける。

「研修しながら月8万円の給与が出て、休みも月4～5回ありますから、条件は悪くありませんね。それだけに牛たちの大切な命をしっかり守っていく仕事だと思っています」

研修期間は3年間だが、ここで多くのことを学び、将来は地元に戻って人工授精の分野を生かしながら地域の酪農家のために働きたいと古内さんは語る。子牛たちはそんな古内さんを興味深そうに見つめ、「早く遊んで」と言いたげだ。牛たちに接する彼のやさしく輝いたまなざしがとても清々しい。

▲古内さんらが宿泊している寮

▶くずまき高原牧場の夏

▼生後3～4ヵ月の子牛の世話をする大上一美さん

●子どもたちに酪農体験を

生後3～4ヵ月の子牛たちが飼育されている牛舎で働いているのは大上一美ひとみさん（21）。牛の世話がしたくて研修生として入社した。ちょうど午後の餌やりの時間だったが、激しく雨が降り出してきた。運動場付きのお洒落な近代的な牛舎で、100頭の子牛が勢ぞろいして餌待ちしている様子は圧巻だ。

ここでは3人の女性が世話に当たっているそうで、餌を欲しがる元気な子牛たちのために大上さんは土砂降りの中を走りまわって牧草を配る。「牛が好きだからここでずっと働きたい」とずぶ濡れの顔をほころばせた。

牧場を案内してくれた上野豊治さん（51）は、高校を出て川崎・鶴見の電気会社で働いていたが、10数年前にUターンしてきた人。「あの頃の首都圏は空気が悪くて、タマちゃんがいた鶴見川も悪臭を放っていました。帰郷しこの牧場で働くようになり本当によかったと思います。この牧場のもう一つの特色は子供たちの酪農体験学習に力を入れていることです。乳搾りから椎茸栽培、羊の毛刈り、アイスクリームづくり等沢山のメニューがあり、真冬にもスノーワンダーランドをオープンします。キャンプ場、展望台、ラベンダー園、レストラン、宿泊施設等もあり、年間30万人が訪れますので、職員の対応も大変ですが、自然や動物とのふれあいを楽しんでもらう場所にと思っています」

くずまき高原牧場では、その他、牛の糞や尿を原料にして熱や電気、有機肥料に有効利用するバイオガスシステムを操業している。

美味しいミルクとワインのふるさと葛巻は、クリーンエネルギー、エコスクール等「新エネルギーのまち」としても注目されている。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

研修生の指導にも当たる上野豊治さん

▲会議室、宿泊施設、食堂等が完備している研修棟

▲宿泊施設グリーンテージ
◀牛乳、アイスクリーム、ヨーグルト、チーズ等バラエティに富んだ製品を作り、宅配もしている

・(社)葛巻町畜産開発公社
☎0195-66-0211

自然とムラの人々に魅せられて

都会からの移住者を地元でサポート

町と移住者の仲介役、(株)都路林産開発

(福島県田村市都路(みやこじまち)町)

都路町が地域おこしのため、官民一体の「田舎暮らし事業」に取り組み始めて20年になる。この間、セカンドハウスを含めて100軒近い住宅を町内に建設し、経済効果はもちろん、雇用促進も実現した。なぜ、無名の小さな過疎の町にこれほど多くの人たちが集まったのか。移住者と町の仲介役となって活動する(株)都路林産開発代表の吉田吉一さんにお話を伺った。

(株)都路林業開発代表取締役の吉田吉一さん(左)と、営業部長の佐久間正安さんは、移住者たちのよき相談相手だ

●20年間で定住者とセカンドハウス利用者が100軒

福島県の東部、阿武隈山系の中央に位置する都路町(2005年3月に合併するまで都路村)は、面積の8割が山林原野という山あいの過疎の町。澄んだ空気と緑にあふれ、まさに都会人が憧れる田舎暮らしにぴったりの環境だ。

そんな都路町で、地域おこしの一環として「田舎暮らし事業」が始まったのは今から20年前。事業の生みの親ともいえる人物、(株)都路林産開発代表の吉田吉一さんに取り組みのきっかけを尋ねた。

「その頃、当社はシイタケの原木などを伐採する林業の会社でしたが、林業が不振に陥りかけていたので、新事業を模索していたのです。そんな時、たまたま毎日新聞の『田舎売ります』という記事を見て、空き家ならここにもたくさんある。これを事業にできないだろうかと思ったわけです」

早速、役場を窓口にして就農者を受け入れたが、農業への見方が甘くて失敗する人が続出。そこで、就農にはこだわらず、山林分譲・田舎暮らし事業へと方向転換した。都会の人に土地を提供して家を建ててもらい、定住またはセカンドハウスとして利用してもらったほうが地域おこしになるのではないかと考えたのだ。吉田さんの予想は見事に的中した。

「バブル経済時代は投機目的や遊び感覚で田舎の土地を求める人が多かったのですが、バブル崩壊後は、定住または定年後の定住を視野に入れてセカンドハウスを建てる人が8割以上になりました。リストラなどの社会不安が増し、真剣に田舎暮らしを考える人が町に集まってくるようになったのでしょう」

最初の失敗を踏まえて、受け入れ態勢も強化した。不動産の斡旋や建築だけでなく、地域住民との良好な関係作りや新住民に対する情報提供、セカンドハウスの管理など、細かなフォローが功を奏し、移住者は徐々に増加。20年間でセカンドハウスを含めて100棟近い住宅を町内に建築するまでになった。

その結果、それまで出稼ぎを余儀なくされ

国道288号線沿いに建つ別荘風の建物が、(株)都路林産開発の社屋

風の渡る音に耳を澄ませたり、自然の中で体を動かしたり…。都路町で過ごす週末は、何物にも代えがたい贅沢な時間だ

自然が大好きで、若い頃から田舎暮らしを夢見ていたという鈴木順一さん。別荘の周りに好きな植物を植えるなど、手作りで環境を整えている

ていた建築関係者（大工、左官、板金屋、建具屋）が町内で働けるようになった。また、移住者や別荘利用者の固定資産税、彼らの消費効果も町の財政を潤わせた。吉田さんによると、それ以上に大きいのは、都会の人がこの小さな過疎の町にさまざまな刺激を与えてくれたこと。移住者受け入れによる地域おこし活動は、この町の歴史を変えるほど大きな力となっているという。

●いいことも悪いことも情報公開

都路町に行くには東京から車で3時間半から4時間かかる。決して便利とはいえない無名の過疎地に、なぜこれほど多くの人が集まってきたのだろう。平成4年にセカンドハウスを建て、週末利用している鈴木順一さん（57）・直江さん（56）ご夫妻（東京都練馬区在住）に、都路町を選んだ理由を聞いてみた。

「第一に自然が豊かなことですね。このあたりは植物の宝庫で、敷地内に秋の七草も咲くし、裏山に行けばカタクリの群生地もあります。自然が好きな僕らにとっては理想的な場所です。第二は土地の値段が安かったこと。それから、移住者に対する受け入れ態勢がしっかりしていたこと。そういう意味では、都路林産開発の存在が大きいですね」

土地の価格の安さについては、都路林産開発の吉田さんも太鼓判を押す。

「都路町では、1坪単位ではなく1反（300坪）単位で土地が売買されるほどなんです。軽井沢や八ケ岳の別荘地と比較し、値段の安さに惹かれて契約したという人は多いと思いますよ」

一方で吉田さんは、田舎暮らし事業を成功に導くためのさまざまな活動を行った。その一つがPR活動だ。

「どんなによいサービスや商品を持っていても、それを公開しなければ誰も知ることができないですからね。当社では、80年代後半から、都会の人と地元の建築関係者、移住者などとの交流を図るイベントを年に1～2回行ったり、『田舎暮らしの本』（宝島社）に毎月、不動産情報を出したりしました」

2004年10月に立ち上げたホームページ『あははおほほの田舎暮らし』も好評で、18万アクセスに達し強力な武器になっているという。しかも、このPRの注目すべき点は、都会の人が喜ぶ〈よい情報〉だけを発信するのではなく、田舎暮らしの心構えや、都会の人が抱いているイメージと現実とのギャップなど、〈負の情報〉も出しているところ。

「たとえば、ここでは冬になると雪が30センチぐらい積もり、気温はマイナス10～12度になります。何も知らないでやってきて、こんなはずじゃなかったと、1～2年で帰ることになることほど辛いことはありません。だから事実を伝える。でも、逆に都会の人はそれを武器にされるんですよ。寒さを利用して、冬に凍み豆腐を作ったりして楽しんでいる方もおられます」

常に「逆の立場だったら…」という考えを念頭において移住者と接してきたという吉田さん。この誠実さこそ事業成功のカギなのにちがいない。

●それぞれのライフスタイルに合った暮らしを実現

都路町のセカンドハウス利用者に、現在の暮らしぶりについて聞いてみた。

東京・中野区に本宅を持つ柿崎孝久さん（77）さんは、40歳代のときに喘息に罹り、定年を機に、妻の満洲枝さん（73）とともに空気のよいこの地で暮らし始めた。満洲枝さんは、

「主人は、ここで暮らすようになって喘息の発作がほとんど出なくなりました。でも治療のために1ヵ月に1回は東京へ帰っていま

・都路林産開発㈱☎0247-75-3333
E-mail:oyakata@ahahaohoho.com

健康のために東京から移り住んだ、柿崎孝久さん、満洲枝さんご夫妻。家の中は満洲枝さんが丹精込めて育てた花でいっぱいだ

す。私は花を植えたり、野菜を作ったりの毎日。東京と違い、近隣との距離感があるのがいいですね。地元の診療所はとても行き届いていますし、夜は当直の医師がいるので安心です。不便なことは、私が運転できないので、主人がいないとき買い物に行けないことぐらいです」

人形作家の斉藤はつゑさん（67）は、田村市常葉町に住んで3年半。1ヵ月に2～3回、本宅のある東京北区へ帰り、東京に住む夫の恒さん（70）が週末に常葉町にくるという二重生活だ。

「ここでは人形を作ったり、公民館で人形作りを教えたりの日々。窓に広がる雄大な美しい風景が創作意欲をかきたててくれます。都路町の魅力は美しい風景と人の心が温かいところですね」

前出の鈴木順一さん（57）・直江さん（56）ご夫妻も週末だけ都路町にやって来る生活。雑木林に囲まれた山小屋風の家で、風が渡る音を聞いたり、草花を愛でたり、ツタや木の実を採ってリースを作ったり……自然を満喫している。

「ここはいわゆる別荘地ではなく、かといって村里でもない。村の人と適度な距離を保ちながら暮らせるところが心地いいですね」

セカンドハウスの維持費は、光熱費はわずかだが、ガソリン代や高速道路使用料などの交通費が、月に4～5万円もかかるとか。それでも、自然に抱かれて過ごす週末は何物にも変えがたく、不満な点はないという。

ひとくちにセカンドハウスといっても、求めるものは人それぞれ。田舎暮らしのための場所探しは、そこで自分たちのライフスタイルに合った暮らしを手に入れられるかどうか、その見極めが大切だということだろう。

文／小田礼子
カメラ／小林恵

農作物の直場所「まんさくの花」で出会った朝日啓子さんも、13年前に茨城県から移住してきた

人形作家の斉藤はつゑさんは、「土のある所で暮らしたい」と4年ほど前に東京から移住。将来は「人形館」を作るのが夢だとか

■田舎でもう一つの生活を楽しむ

土に触れ、星を眺め、山野を歩く―

週末は"自然と神話の里"でリフレッシュ

（奈良県曽爾村）

棚田の地形を生かして建てられたクラインガルテン曽爾

自然信仰による数々の神話と山紫水明の郷・曽爾村。小長尾地区の棚田あとを利用して作られた「クラインガルテン曽爾」は、斜面の地形を生かして農場とラウベが配置されており、周囲に山々を望む絶好のロケーション。日帰りで農園作業を楽しむ場所もあり、地区の農家がスタッフとして加わり企画や指導に当たっている。多くの利用者が訪れて家庭菜園を楽しむ11月の連休に訪ねた。

曽爾は「漆部の郷」

奈良県の東北端に位置し、北部は香落渓を経て三重県に接する曽爾村は、飛鳥時代の素朴で美しい建造物で知られる室生寺のさらに奥地にあり、日本誕生にまつわる神話や自然信仰の伝説が沢山残っている。村は北部に兜岳、鎧岳等の山々、西部に柱状節理の岸壁や巨大な屏風がそそり立つ屏風岩（標高936m、国指定天然記念物）、東部には秋のススキが幻想的な銀世界を作り上げることで知られる曽爾高原があり、その間を曽爾川が流れ、川に沿って県道と集落を形成している。

倭武皇子がこの地に自生している漆の木に注目して漆部造を置き、これが日本のウルシ塗りの始まりと言われていることから、曽爾村は「漆部（ぬるべ）の郷」とも言われている。神社寺院や仏像造りに欠かせないウルシが、ここで漆部の郷の人々によって原液が集められて奈良・平安朝廷に届けられていたという話は興味深い。

このような里に奈良県で始めてのクラインガルテンが誕生した。30区画に100件を超える応募があり、抽選で利用者を決めたという。

絶好の秋日和に恵まれた11月始めの飛び石連休の日にクラインガルテン曽爾を訪ねた。役場近くの食堂で名物の「木の葉丼」に舌づつみしたあと、曽爾村むらづくり推進課の徳田守課長の案内で市民農園のある小長尾地区へ向かった。

「村の大半が室生赤目青山の国定公園に指定されていて、近畿でも屈指の自然景観地区です。いまは全山ススキの曽爾高原と奇岩と紅葉の香落渓が見事で、遠くから見学にやってきます。ただ我々行政側にとっては、山間の小盆地であるため、主要幹線道や生活道路の整備、地域資源を生かした開発事業、5%しかない農用地での地場農業の育成など、課題も沢山あります」と徳田課長から村の概要について説明を受ける。現在人口は2162人、739世帯で、ゆるやかながら減少を続けており、クラインガルテンのある小長尾地区は47世帯172人が暮らす農村地帯である。

一面のススキが銀色に波打つ曽爾高原

田舎でもう一つの生活を楽しむ

管理棟。地元の丸太木材を使って建てられた

棚田の地形と農への思いを生かして

農家の高齢化や若い世代の農業離れ等で耕作維持が困難になってきた棚田。この一部を都市住民との交流地にしたいと地域と村が協議をすすめてきた結果、村では平成13年より農業経営構造対策事業として滞在型市民農園の建築に着手した。棚田の地形をできるだけ生しながら上下水道や道路、敷地を整備したため、4億7500万円を投じることになった。敷地の総面積は約3・6haで、棚田を持つ農家から13年間賃貸契約している。

「クラインガルテン曽爾」は平成15年4月にオープンした。木造二階建てカラー鉄板葺き43・2㎡のラウベ30棟が、斜面にバランスよく建てられ、畑は原則として家の前や脇にあるが、用地の関係で離れた場所の人もいる。農園の中央に管理棟と農業用具を収納した倉庫がある。車は2区画を除いて、ラウベの敷地内に駐車できる。

市民農園の一段下がった場所には棚田が残り、日帰り市民農園として活用されている。こちらも利用者を募って会員制にしているが、地元の子ども達や農園利用者を対象に、田植えや稲刈りなども行われている。

管理運営は村の三セク（財）曽爾村観光振興公社が当たり、小長尾地区の農業者2名が管理人として常時勤務している。さらに地区の農家15名も施設全体の草刈り、イベントの企画実施、利用者への野菜づくり指導員として登録され、管理棟は皆の気さくな交流、休憩室として活用されている。

1区画約150㎡～220㎡の土地に約43・2㎡のラウベ（貸別荘）と50～100㎡の菜園付きで、30区画あり、年間の利用料は滞在型が50万円、日帰り農園が5万円になっている。

使用期間は原則として一年間だが、5年間更新ができる。

1月より利用者の募集をしたところ、奈良県で始めてのクラインガルテンということもあり130件の問い合わせがあり、現地説明会にも100名が参加、最終的に2倍の応募があったため抽選で入所者を決めた。現在奈良県から18人、大阪府から10人、京都府と三重県から各1人利用している。当初に比べて大阪からの利用者が増えているようだ。曽爾村まで大阪から高速を使えば2時間強、東京から軽井沢へ行く感覚で利用できる。

地元産の木材で建築した管理棟の中で、管理人の土井潔さん（68）と農園利用者数人が待っていてくれた。窓辺からは吉野の高見山山系が連なる山並みが見える。

「どの家も大抵、南側に広い窓とベランダを設けていますから、居間やベランダは一日陽ざしに恵まれ、眼下に見える街並みや前方の山々が素晴らしいですよ」と利用者のひとり三田（さんだ）洋司（63）さんは言う。

自然の豊かさ、景観のよさは抜群

三田さんは当初から入所したひとり。八尾市で電気メーカーに勤めるサラリーマンだったが「念願の定年となり、曽爾によく来ています」と言う。

「あらゆる種類の野菜作りと山歩きが趣味ですねン。昨日は室生寺周辺を歩いて来ました。この裏手の山も室生山系に続く自然郷、春から秋まで山歩きがとても魅力的です」と自然の豊かさを語る。

「ここへくるまで土がどんなものかも知らなかった。耕し方から育て方まで何もかもここで教えてもらいました」

いまでは自慢の家庭菜園畑になり、店頭で見るような立派なミズナ、サニーレタス、ブロッコリー、ミツバ等のヘルシー志向の野菜が育っていた。管理棟に保存されている記録綴には、入所間もない三田さんが、汗を流しながら土運びをする写真が残っている。

普段一人で来る時はのんびりバスに乗ってやって来て、奥さん同伴の時はマイカーを利用している。2日前から来ていて今日は大阪へ帰るという。私たちの取材を終えたあとは、バスの時間が迫ったため、土井管理人が運転する軽トラでバス停へ向かっていった。

三田洋司さん。山歩きが好きでバスを利用する

週末に来て夜通し星座の観測をする松崎進さん。下はラウベの居間で奥さんと

流星群観察のために凍てる冬も皆勤

管理棟に程近いラウベに住む松崎進さん（68）と亮子さん（62）夫妻。庭には天体望遠鏡が設置されており、居間には星座のパネルや宇宙に関する本が置かれている。「いまは獅子座流星群を追っかけているんです」と松崎さんは目を輝かせて語る。「ここは360度よく空が見えます。新しい星もいくつか発見しましたが、すでに他の人が登録している場合が多いんです。週末にはできるだけ曽爾に来て、夜中に星の観察をしています。いずれ私が発見者となる星を見つけますから」

兵庫県出身、大阪で暮らしていたが、夜空の見える場所に暮らしたいと奈良県河合町に引っ越した。しかし河合町も最近は市街化して明るくなり、星空が見えにくくなった。そんな時曽爾村のクラインガルテンの募集を知り応募したという。

タッパー等台所で使うプラスチック製品の製造会社を経営している。30名以上いた社員は現在6、7名と規模を縮小、それだけに多忙だが、仕事を終えてからも曽爾へ出かけて来て夜空の星を観察、夜明けにひと眠りして朝帰ることもある。

理科の好きな少年だった。20㎝レンズの天体望遠鏡や台座などは部品を買って来て手作り、費用は150万円以上のようだ。他に星座に関する専門図書も購入し、新星情報には目を離せない。

「冬はマイナス10度になることもありますから、ホカロンをレンズやからだ中につけて熊みたいな格好で外に立っていますよ」と奥さんが笑うと、「レンズも暖めないと曇りますからね」とご主人。そして「当初は畑仕事に興味がなかったんですが、家庭菜園も楽しいですね。採れたての野菜は本当に美味しい、消毒してないのでナマでパリパリ食べられます」と語る。

亮子さんは「私は月1回ほどしか来られないんですが、ここはとても素晴らしい。高速を使えば1時間で来られます」と言って、美味しい珈琲を煎れてくれた。

地元の間伐材を使って建築したラウベの居間は広々として、木の暖かさに満ちている。スギの丸太を大黒柱にしたアイデアもよく、国産材への関心が高まりそうだ。

野菜づくりに夢中

松崎さんの家の下の畑で、小さい女の子が両親と一緒に働いている。間引きした大根の

田中秀明さん一家。未来ちゃんも畑仕事をお手伝い

大半を曽爾で過ごし、野菜作りに精出す増田さん夫妻

葉をチリトリに入れるお手伝い。田中秀明さん（37）佳代子さん（31）夫妻と長女の未来（みく）ちゃん、3才。「この葉は塩でもめばすぐ食べられて美味しいですよね」

とお母さんが言うと未来ちゃんも頷く。

「今日は日帰りで大阪からやってきました。昼食してお昼寝して夕方には帰ります。親達が申し込んだ家で、皆が交替で来ては1週間以上いることもあります」とお父さん。

今日はおばあちゃんと下の子どもも一緒にきています、とお母さんが言うと「犬も来ているよ」と未来ちゃん。「歩いているとイナゴやてんとう虫がいる。いまは赤とんぼも沢山飛んでいて子どもは大喜びして駆け回ります。自然が豊かでとても穏やかなところです。家の窓は二重になっていますので冬も暖かく、よく利用しています」と言っていた。

管理棟に近い家の畑で鍬を使って作業しているのは増田隆さん（75）信子さん（73）。生駒市から来て、大半をこの農園で過ごしているという。

「いまはさつまいもを掘っています。そのあとはほうれん草を植えて春にいただきます。田んぼだった土地なので土が硬く締っていたけれど、いまはホクホク。何でもよく育つけれど、虫もよく食べてくれる。それが当たり前ということを悟りましたわ。カラスも来るしイノシシも現われて、それがまた楽しいね」と増田さんは言う。

管理人の土井さんが「もうイチゴの苗は取り除いた方がいいですよ」とアドバイスする。この苗木は土井さんが届けたものだが、どんどん根を広げ実をつけるので二畝（うね）にもなってしまったらしい。

「毎日、朝掴みいちごをたらふく食べました」とうらやましくなるような話。

土井さんは土地ッ子で、農業をしながら小さな工場を経営していたこともある。ここで管理人として働き、生き甲斐を感じていると言う。倉庫には野良仕事に必要な小型耕耘機から鍬や鎌、鉈などが一通り揃っており、入居者は自由に使うことができる。いも煮会、もちつき大会等の行事もあり、農家と交流しながらの親睦活動が活発に行われていた。

利用者希望者が多く、一度入所した人は退去が殆どないため、村では今後も増設することを検討している。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

農機具も一通り完備、手入れに余念がない土井管理人

・クラインガルテン曽爾☎0745-98-2111
・曽爾村むらづくり推進課☎0745-94-2101

■田舎でもう一つの生活を楽しむ

別荘暮らしで始まった、もう一つの人生

八ケ岳山麓・松原高原別荘地

（長野県小海（こうみまち）町）

▶上／秋の松原湖
下／有山さん夫妻の家と愛車・軽トラ
▼別荘のシンボル小人プティリッツア

別荘族。地域にとっては「週末にやってくる都会の人」でしかなかった別荘暮らしの住民たち。しかし、そんなイメージの枠を超え、地域の暮らしに深く踏み込んだ生き方を探りあてた人たちがいる。地元の人たちとの腹を割ったつきあい。そこから生まれた交流は、地域に思いがけない新風を吹き込んだ。今では町おこしに欠かせないメンバーとなった人たちの、豊かでユニークな別荘暮らしを取材した。

有山至・敬子夫妻。軽トラに乗って買物からお帰り

毎週末は別荘ライフ
有山さん夫婦

八ケ岳山麓に広がる高原の町、長野県南佐久郡小海町。高原列車小海線に沿って南北に伸びる国道から、西にわずかな距離を進むと、紅葉の森を湖面にくっきりと映した松原湖が見えてくる。

松原高原星見ヶ丘別荘地は昭和45年に売り出され、小高い丘の落葉松林の中に現在250戸の別荘が点在する。

有山至・敬子さん夫妻の別荘は小海町高原美術館の近く。スイスの山岳地帯にみられるような風格ある建物の前で、ご主人の至さん（62）が大きく手を振って迎えてくれた。東京でテレビマンとして活躍してきた至さんは、日本テレビに入社以来、ドキュメンタリー番組などの現場で28年間、チーフプロデューサー兼ディレクターとして活躍してきた。現在の肩書きは（株）読売映像専務取締役・制作本部長といかめしいが、ご本人はいたって気さく。相手を構えさせずに楽しいテンポで自在に話を進める。そんな人柄のせいか別荘での有山夫妻は、よそ者にはとかく閉鎖的といわれた地元の人たちの中へどんどん溶け込み、「別荘住民」「地元」という垣根を苦もなく取り払ってしまった。

5年前にこの別荘を購入して以来、週末には東京日野市の自宅から毎週のようにやってくるという夫妻。小海町では、地元の人が便利に乗っている小さな軽トラに乗り換えて、二人でどこにでも出かけてゆく。行った先のそば屋でパン屋で野菜販売所で、顔馴染みや知り合いが日毎に増えていった。

食にこだわり料理が得意な夫妻のところには地元の人がいつも集まる。ご馳走になったポトフも美味だった

安藤忠雄設計の小海町高原美術館とその一角にあるレストラン「花豆」。敬子さんの独創的な料理が大人気

町営レストラン「花豆」オープン

食と福祉と環境問題。テレビマン時代に至さんが手掛けてきたこうした分野は、小海町の町づくり構想とさまざまな部分で重なるものがあった。「こうみ塾」という町づくりのメンバーたちが、有山さんの別荘に次第に集まるようになり、町おこしのイベントや企画に夫妻も関わっていく。

そんな集まりの中から料理上手な有山さんの妻敬子さん（59）に、高原美術館内のレストランを任せたいという話がでた。オープンは4月末から10月までのシーズン中の毎週末。「そんなに儲けなくても、有山さんが損をしない程度に」という町からの大らかな要請に、敬子さんは応えた。

八ケ岳連峰と秩父山塊の裾野に広がる小海町は、高原野菜の宝庫。その野菜を活かしたいと敬子さんは考えた。海外取材で40ヶ国もの国を歩いたというご主人の至さんも、各国料理のアイデアを出した。

レストラン「花豆」は2005年4月末にオープン。安藤忠雄設計の瀟洒な小海町高原美術館の一角に、明るく開放的な敬子さんのレストランが誕生した。

独創的で美味しく、値段もリーズナブル。「花豆」は観光客に別荘族に、そして地元の人にも評判を呼び、週末だけのオープンを残念がる声が出るほどの店となった。

地元の暮らしや風習の中へ

二人の行くところ常に人が集まるという、不思議な磁力をもつ有山夫妻。レストラン「花豆」も気がつけば、地元の人の溜り場となっていた。行き来のなかった別荘の住人同士もここで知り合い、付き合いの輪が広がっていった。

「小海に来て、もうひとつの生活が始まったという感じですね。とにかく楽しく、忙しい。ここへ来ると、朝は4時起き。もったいなくて寝ていられないんです」とご主人の至さん。月曜の朝ここを出て、新橋の会社へ直行という日も多いという。

地元にとっては当たり前すぎた高原野菜の美味しさ。野菜本来の力をもったその美味しさを、敬子さんはもっと沢山の人に知ってほしいという。

「週末だけでなく、平日の営業も少しづつ考えています」と意欲をみせる敬子さんだ。思わぬ展開となった町営レストランの開業。別荘族として通り一遍に過ごしていれば、知ることのなかった地元の人々の暮らしや風習、楽しい気質。そうしたものたちとの出会いがあったからこその、それは新しい一歩だった。

蝶々好きが選んだ松原湖

宮 昭雄さん

宮昭雄さん（69）が初めて小海町を訪れたのは、26年前。知的障害をもつ当時3歳の息子の宏一郎さんを連れて、妻の興子さん（62）とやってきた。

電車に乗るのが大好きだった息子と、蝶々が大好きな夫のために、興子さんが地図で見つけた松原湖。来るたびに余所にはいない珍しい蝶々を見つけ、自然豊かなこの土地に家族は惹かれていった。

50歳の時に松原高原星見ヶ丘別荘地に土地を購入。2年後に当時勤めていたソニーの退職金をあてにし、東京の家を担保に銀行から金を借り、家を建てた。

退職までは週末と夏休み、家族揃って来ていたが、息子さんの成長に伴い、家族でやってくる頻度は少なくなった。息子の宏一郎さんは、宮さんが教えた卓球の腕をあげ、熱中する日々が続いた。

ソニー退職後、宮さんは小海町の観光協会でアルバイト。山歩きを楽しみながら、東京

▶小海町と景観が似ているところから毎年行われる「フィンランド祭」はこうみ塾の主催
▲スモークハムづくりは有山さんの別荘での楽しみのひとつだ

住民票を小海町へ移し地域活動に取り組む宮昭雄さん。家の中は本の山でホームページで情報を発信。外では薪割りや野鳥の世話も楽しみな仕事のひとつ。宮さんのwebサイトにはアクセス件数7万を越えた

と小海町とを行き来する生活を3年程続けた。小海町への愛着は深まる一方だった。

やがて、この町のことをもっと知りたくなり、町おこしグループ「こうみ塾」のメンバーとなる。

住民票を移し、町議会議員に

そんな宮さんが住民票を東京から小海町に移し、小海町町議会議員に立候補したのは平成17年年のこと。この町の四季の自然の際立つ美しさを、子供たちに残したい。地域の人にとっては当たり前すぎるこうした町の財産を、外部の人間の目で町の人に伝えていきたい。自分の役割は議会と町民とのパイプ役と考えての立候補だった。

こうみ塾メンバーを中心とした強力な応援団も結成された。しかしこの年は議員定数を下回る立候補者数となり、全員が当選。晴れて人口5、800人の小海町町民となり、宮さんの議員生活がスタートした。成人した息子の宏一郎さんは東京のシティバンクに勤務。町議員選出馬に理解を示してくれた妻の興子さんは、好きな絵を描きながら息子とともに東京で暮らす。時々小海の別荘に二人がやって来たり、宮さんが東京の家を訪ねたりという生活が続いている。

森の小人プティリッツア

宮さんの別荘は広大な星見ヶ丘別荘地の西側地区に建つ。その玄関脇に立つのは、間伐材で作った小人の人形2体。この町の人々が「プティリッツア」と親しみをこめて呼ぶ、町のシンボルキャラクターだ。

今では町の公用車にも役場の職員の名札にも、スーパーマーケットの買物袋にも印刷されているこのキャラクター。その生みの親が宮さんなのだ。ホームページに書き込まれた宮さんのプティリッツアは、「松原湖高原に棲む森の小人で、豊かな自然と暖かい心を持った人間の住む土地にしか生きられない」というストーリーを持つ。

この森の小人プティリッツアを小海町のシンボルキャラクターにと勧めたのは、「こうみ塾」が勉強会に招いた町おこしの専門家だった。彼は事前に宮さんのホームページをチェックし、プティリッツアの存在を知った。今では小海町の顔となった森の小人は、この町の自然や人々をこよなく愛する宮さんと、どこか重なる。

鳩椋十の全集や生物、自然の本が書棚に並ぶ自室で、夜、好きな詩集を読んでいる時がいちばん心安らぐという宮さん。「家族とは離れているけれど、互いの時間を尊重しあっているこういう生活、悪くないと思っていますよ」と話すその顔には、自身の選んだ生き方に謙虚に向き合っている、迷いのない眼差しがあった。

文／金山淑子　カメラ／満田美樹

・小海町高原美術館☎0267-93-2133
・宮昭雄ホームページ　http://www.ptylitza.jp
高原と湖と雲と「空」の生活

不動尊クラインガルテン。左はクラブハウスとイベント広場

「日曜農学校」の開校等、早くから農家と都市住民との交流事業に取り組んで来た丸森町では、平成12年に不動尊地区に、17年に筆甫地区に滞在型市民農園（クラインガルテン）を開設した。その運営管理を委託された地元の農家や住民は、それを機に直売所や食事処を自分達で運営するなど、さまざまな事業に取り組んでいる。生き生きと大忙しな地区の人たちと、クラインガルテン・ライフに満足している利用者に話を聞いた。

■田舎でもう一つの生活を楽しむ

都市交流事業は地元住民主体で
2地区に滞在型市民農園（クラインガルテン）（宮城県丸森町（まるもりちょう））

地区住民が主体になって魅力づくり

丸森町は阿武隈川が町の北部を流れ、江戸時代から船運が盛んだったため、河畔に近い中心部には船運で栄えた豪商の蔵や住居、史跡が数多く残っている。いまも阿武隈川ライン下りが年間を通じて人気を呼んでいるが、阿武隈急行線（昭和61年三セクとして再スタート）の運行により、仙台市と福島市との交通アクセスが整備され、沿線には住宅地も増加している。阿武隈川を挟んだ丘陵地は雑木林の中に棚田や畑が広がる中山間地で、これらの地区は、かつては養蚕が盛んで県内第一の生産量を誇っていて、酪農と共に「シルクとミルクの町だった」と案内してくれた丸森町産業観光課木皿理さんは言う。

「丸森町は昭和29年に8つの町村が合併して誕生し、総面積は273・3㎢あります。山間部に集落が点在していて行政効率が悪く、端から端まで一時間位かかります。養蚕家が減り桑畑の耕作放棄が目立つようになり、農家も高齢化が進んでいる。何とかしなくてはいけないと、町と農家、地域住民が一体となって取り組み始めたのが都市との交流事業です。その一環であるクラインガルテンの開設は、休耕地を活用して農家の知恵を管理運営に生かしてもらおうとスタートしました。さらに町では、各地区の特性を生かす「地区別計画」の策定を推進し、現在はそうした地域で都市部住民と交流する活動が積極的に行われています」

不動尊クラインガルテン、筆甫クラインガルテンは都市部の人たちとの交流拠点になり、管理運営を委託された地域では、多くの人に足を運んでもらえる魅力づくりに取り組んでいる。

「これからも利用し続けたい」不動尊クラインガルテン

県立公園内にある不動尊地区は、キャンプ場、国民宿舎を有し賑わってきたが、その先の遊休桑園等を活用して平成12年に誕生したのが滞在型市民農園「不動尊クラインガルテン」。一区画300㎡の土地に延べ約43㎡のロフト付き木造家屋と約150㎡の畑があり、2箇所に別れて18区画ある。農園中央部はイベント広場、その先には施設を管理する事務所、利用者と地区住民の交流に利用されるクラブハウス、そして入口には地区の農産物を土日曜・祝日のみ販売する直売センターがあり、県内外から野菜や手作り食品を買い求めにきた人々の車が広い駐車場を埋めている。

▲東京から来て月の半分を丸森町で暮らす秦野さん夫婦

▲左から不動尊市民農園管理組合菅野組合長、庶務の池田さん、役場産業観光課木皿さん

岩沼市から足繁く出かけてくる吉見さん
下は不動尊クラインガルテン第二農園

管理運営に当たるのは地元の住民約40名で組織する不動尊市民農園管理組合。菅野智光組合長と庶務の池田義弥副会長がクラブハウスで待っていてくれた。

「開場して6年目になりますが、皆さんよく利用してくれ、畑も農家顔負けに手入れしています。当初から利用していただいている方も多く、これからもずっと利用したいと好評です。でも毎年新たに利用希望者を募ることになっていますが、今年は1名の募集にとどまり、利用者の希望に応えられないのが悩みでもあります」と池田さんは言う。

利用者は年間36万円（光熱費別途）の使用料を支払い、月2泊以上か4日以上利用すること、畑で野菜や花卉などを有機栽培することを条件に、最長3年間の使用が可能と定められている。利用者は東京から2戸、千葉から2戸、福島から2戸の他は仙台市を中心とした宮城県内の人たち。

「年齢的には中高年者が多いんですが、子どもや孫も来るので休日は賑やかですよ」

このままずっと利用したいという人を3年過ぎたからと利用不可にはしにくい。そのためさらに山間の集落、筆甫（ひっぽ）にも8区画のクラインガルテンが開設された。

利用者のひとり、東京から来て月の半分をクラインガルテンで暮らすという秦野義一さん（68）とき子さん（61）夫妻を訪ねた。クラブハウスに近い第一農園にあり、畑は他の家よりやや少ない。

「私が丸森の出身で、市民農園のことも実家の者が教えてくれました。兄妹や親戚が沢山いて野菜は食べきれない程くれますので、畑の必要はないんですが、健康のためにもと今年から家庭菜園をはじめました」ととき子さん。義一さんは東京蒲田で工場を経営してきた技術者。「車で3～4時間かけて来ますので、来たら月の半分は丸森で暮らします。景色のよい散歩道や地元の美味しいものを食べさせてくれる店もあるので飽きません。管理に当たる農家の方たちが誠意を尽くしてくれますので、生涯ここに住みたいと思っているんですが、次の3年間も契約できるでしょうか」と義一さんは言う。

玄関を入ると台所、バストイレ、倉庫、収納庫があり、その先の休憩室と呼ばれるリビングは10帖ほどの広さ。2階のロフトへは梯子で昇り降りするが「年取ると急な梯子を利用しにくく物置になってしまいました。それだけが不満です」ととき子さんは言っていた。

第二農園は第一から徒歩2～3分の小高い雑木林の中にあり12棟が並んでいる。訪ねた吉見達雄さん（61）は4年前から入所しており、週末に来ていたが、昨年8月に定年退職してからは平日も来町していることが多いという。家は車で約1時間の岩沼市にあり、JRの研修施設で教官をしていた。奥さんは看護士として現役で働き、一緒に来ていたが、現在は病気の検査等で不在。居間には奥さんの趣味と思われる押葉や生花がさり気なく飾られ、窓の外には吉見さんが丹精込めて作っている野菜畑の緑が鮮やかだ。

「僕は家でも長年家庭菜園をしてきましたが、ここの広い畑は何でも作れて、しかも高原だから味がいいんです。ただすぐ前が山だから、一人でいると夜にはハクビシンなどが出て来て庭先を歩いている気配に少し緊張します。それでよく来ている向いの家の旦那と一杯飲むことにしているんです」と笑う。雨の日も心地よさそうな部屋だ。

庭に出てみると、もう収穫を終えて片付けるというトマトやきゅうり、なすの他、大根、里芋、菜っ葉、ねぎ等が元気いっぱいに育っている。

生鮮野菜直売で地域に活力

不動尊市民農園管理組合ではクラインガルテンの管理運営や交流事業の他に、直売センターを設けて生鮮野菜やお米、お母さん手作りの菓子や漬け物等を土日に限り販売している。店は朝から行列ができる程の賑わいで、当初町が整備したスペースでは足りないため、昨年春組合と町が相談し資金を借入れして大幅に増築した。

「何しろ新鮮で美味しくて安いんです。だから毎週のように仙台から来ます」と段ボール2箱を車に積む夫婦が

県内外からも買いに来る人気の直売センター

木造の平家建てラウベ、筆甫クラインガルテン

・丸森町役場産業観光課☎0224-72-3026
・不動尊市民農園管理組合☎0224-73-1150
・筆甫体験農園管理組合☎0224-76-2230
・不動尊直売センター☎0224-73-1150
・筆甫そば処「清流庵」☎0224-76-2690

語るように、農家が作った野菜や果物、食品は午前中に売り切れることもある。「全体で月200～300万円の売上げになりますので、皆一生懸命農業に精出すようになり、休耕地はゼロ、農業後継者も育っています」と菅野組合長は言う。レジを手伝っている若い人たちは息子や娘たちだろうか。

クラブハウスの台所ではグループ「きさく亭」の女性4名が、赤飯や五目ご飯、饅頭、おにぎり等をパックに詰めていた。1個100円の見た目も美しい大おにぎりが店頭に並ぶと、飛ぶように売れていく。「美味しいと喜んでもらえるよう、私たちも野菜や茸などの収穫期に合わせてメニューを工夫しています。平日もその準備に追われ、忙しいけど充実した毎日です」と仕事の手を休めることなく語ってくれた。

住民と利用者が作業を楽しむ筆甫クラインガルテン

木皿さんの案内で筆甫クラインガルテンへ向かった。不動尊地区から内川渓谷に沿って広葉樹の茂る県道を行くと、目の前に岩岳の岩稜が見え、やがて人家や田んぼが現われた。筆甫地区は丸森町の隠れスポット、その先は福島県になる。

民家の多い集落の中心部にほど近い丘の上に筆甫クラインガルテンがある。元桑畑だった斜面を整地した場所で、手前の段に4棟、次の段は管理棟とイベント広場、その上の段に4棟建っている。丸森の木材をふんだんに使用した平屋建で、前庭には競うように秋の花々や野菜が育っている。1区画約300㎡の土地に建坪約51㎡の家と約150㎡の畑付きで、利用料や利用契約期間は不動尊の場合と同様となっている。

酒井長夫組合長は「クラインガルテンを作る計画の時点で我々地元の者も参加して、山の中の隠れ里のような雰囲気を生かし広々とゆったりした施設をとお願いしました。ラウベは平屋建てで不動尊より広く、一歩外へ出ると長屋風なので、入所者同志もすぐ親しくなれるようです」と言っていた。

残念ながら私たちが出かけた日は地域住民と利用者によるハイキングが実施され、車は停まっていたが誰もいない。後で聞くと、豪雨だったため中学校の文化祭を見学にいった後、近くの山で紅葉を楽しんだという。

管理運営に当たるのは筆甫体験農園管理組合の人たち。山菜取りや田植え等を体験するカリキュラムもあり、普段でも月一回は「茶飲み会」を開いて意見交換をしている。

「この地区は山間部にあり、利用者も少人数で、地区住民との交流が密で、地区をよく知っていただくような組合の活動も多いようです」と産業観光課の木皿さんは言う。

「実はこの筆甫地区、特産物づくりや都市部との交流活動の風土が生まれつつあります」と言って案内してくれたのが土日と祭日に開店しているそば処「清流庵」。製材所をしていた人の住宅を組合で借りてそば処に改装した店で、地元で栽培したそばを手打ちしてもてなす。30人ほど座れるテーブルはほぼ満席。

この店の運営は、そばの栽培を筆甫山品栽培生産組合（会員25名）、そば処の運営をひっぱ手打ちそば部会（会員22名）が行っている。3人の男性が交替でそばを打ち、女性3～4人が台所の大釜で茹でて煮物等を添えて膳に盛る。

ガラス張りの工房の中でそば打ちをするのは藁谷清さん（75）。「役所勤めをしてたんですが、区長になってからそばで地域おこしをしたいと思うようになり、60過ぎてからそばの修業をしました。地元で採れたそばをその朝ひいて手打ちにする。ここは水も名水級なので、いいそばができます。それにお母さんたちが愛情こめて作る秘伝のダシやソバ稲荷、五目ご飯も人気ですよ」と藁谷さんは一息つきながらにこやかに語る。筆そば（ザルそば）、筆そばセット（炊き込みご飯付）をいただいたが、香りよく歯ごたえも満点の大変美味しいそばだった。隣には「そば打ち体験館」もあり、最近はお父さんたちの利用が増えている。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

右／不動尊地区「きさく亭」のグループ
左上／清流庵の「筆そばセット」
左下／そば打ちをする藁谷さん

自然とムラの人々に魅せられて

ニセコの大自然に抱かれて

若者は北の大地に憧れて移住する。中でも羊蹄山やニセコアンヌプリの雄大な山々の麓に広がる台地は、温泉、スポーツのメッカとして人気の観光地であると共に、そこで働きたい若者達を受入れてくれる開放的な土地柄でもある。しかしこの厳しい自然環境の中で年間を通して生活していくには覚悟が必要。インストラクター、手作りパン屋さん、木工職人等の技術を身につけて、この地に定住を決めた4組の若い世代を取材した。

スキーの聖地でインストラクター

矢吹さん夫妻（北海道ニセコ町／倶知安町（くっちゃんちょう））

11月中旬、北海道の山間地には早くも雪が舞いだし、ニセコ町は純白の銀世界になっていた。「今年は早そうで、楽しみですね。いまのうちにしっかり休養してスキーシーズンに備えます」といって出迎えてくれたのは矢吹全さん（34）、理香さん（35）夫妻。昨年ニセコ町から倶知安に引っ越してきたという。一戸建て借家は市街地に近い高台にあり、目の前は見渡す限りの畑、その先に新雪に輝く羊蹄山がそびえている。

「家は農家が作った借家で、野菜でも作るようにと小さい畑もあります。でもときどき野菜を届けてくれるのでトマトを栽培する程度なんです」と理香さん。10帖の居間に6帖の部屋が2つある17坪ほどの家で家賃は3万円だという。「仕事のない時期は収入はないわけですが、ここでは贅沢しなければ生活費もホント少なくてすみます」と理香さんが言うと「いざというときは川へ魚取りに行けば、食べきれない程だよね」と全さんが応じる。

●ネイチャーツアー客に感動と安全を

矢吹全さんはニセコ町の観光会社（ガイド会社）に所属し、そこのカリキュラムにそってインストラクターとして働いている。カヌー、スキー、クロスカントリー、登山等のガイドと体験をサポートする仕事で、最近は旧

▲矢吹さん夫妻が借りている家。畑の向こうは羊蹄山
◀ピアノを弾く矢吹さん

所名跡を見て歩く観光から自然体験を楽しむネイチャーツアー客が増えて来たため、矢吹さんたちは結構忙しい。

「総合学習の一環として本州から来る中高校生と中高年のグループが増えています。我々の仕事はまず安全第一なので、少数に分けて体験学習してもらいます」

矢吹さんは北海道旅行やニセコへスキーに通ううちに「ここしかない」と移住を決意した。実技の他に、動植物等の自然、北海道の気候や地理、歴史もマスターして、かなり難しいといわれるインストラクターの試験に合格、資格を取得した。

●身近に素晴らしい自然と本格的スキー場

カヌーや登山等の仕事は5月のゴールデンウィークから11月上旬までで、冬は待望のスキーやクロスカントリーのガイドが始まる。

矢吹さん夫妻がお気に入りの森の一つへ案内してくれた。白樺を中心とした雑木林（天然林）で、地面は雪だが、野鳥の姿も見られる。「自宅から車で30分も走れば自然がそのまま息吹いている、これが北海道の魅力です」と矢吹さん。ここには本州で絶滅が心配されているキツツキ系の鳥（クマゲラ）やオオタカも多数棲息しており、野鳥や野生動物に関心の深い矢吹さんは、昨年から野生動物の実態調査も行っている。

「いまは小屋の屋根も見えて我々は高い樹を見上げているわけですが、1月になるとマイナス20度、3m、多い年は5mの雪が積もりますから、景色は一変します。その上をカンジキ（スノーシュー）を履いてツアー客をガイドするわけです。空がすぐ上に広がり、樹の上の方の春になったら芽吹こうとしている小枝のつぼみや野鳥をすぐそばで見ることが出来ますから、参加した人は世界が変ったようだと感動します」

家から見た夏の風景（じゃがいも畑と羊蹄山）

▲クロスカントリーをする矢吹さん ▼カヌーのガイド（提供/矢吹全氏）

▼スキーの手入れをする矢吹さん

春から秋にかけてゴルフ場で仕事をしている理香さんは、冬はスキー場で働く。かつてOLで、スキー経験が豊かなキャリアウーマンとして信頼されているようだ。二人とも筋金入りのスキーファン、仕事のあとは殆ど毎日ナイタースキーを楽しむ。

「ニセコはスキーヤーにとって聖地、憧れの場所です。本格的スキーをやりたいと毎年本州から大勢やってきますが、国際的に活躍する外国のスキーヤーやスノーボーダーも来日しますから、ニセコのホテルマンは英語が必修です」

ニセコエリアには7つのスキー場があり、地形を生かした多彩なコース、豊富で良質な積雪、さらに特色ある施設やサービスの提供が人気で、長期滞在する人が多い。

●道の人々は新住民にとても暖かい

矢吹全さんは横浜市出身。大学時代にスキーや登山に夢中になり、スキー場や山小屋で働いた。理香さんとは白馬のスキー場で知り合ったという。

理香さんは神奈川県厚木市で生まれ育ち、丸井（デパート）に勤めた。早くから車に乗

・(株)ニセコリゾート観光協会☎0136-44-2420
・ニセコ山系観光連絡協議会☎0135-73-2011

って地方へ出かけるなどの行動派で、矢吹さんから北海道暮らしを提案されたときは迷わずOKした。28歳の時二人は結婚、親達を説得してニセコへ移住した。

「両親は当初、ちゃんと食べていけるの、いつ帰ってくるの、と言っていたんですが、今ではあきらめて、早く家を建てろとか子どもはまだかと言っています」と理香さんは笑う。

無理して働きたくないから、当分は借家住まいでいこうと決めているようだ。

矢吹さん夫妻は「北海道の良さは、道の人々は我々のような新住民をとても暖かく受入れてくれることです。自由で住みやすい。だからこそ私たちも地域のためになりたいと思います」

奥の部屋には、いつでも滑り出せるように手入れされたスキーが7基あり、脇には電子ピアノもある。リクエストすると、全さんはショパンの曲をこともなげに弾いてくれた。幼い時から毎日ピアノを練習してきた。いまも暇な時は一日数時間弾くこともあるようで、「自然の豊かなこういう場所で弾くのはとても気持いい。いざという時は子どもたちにピアノを教えますかね」と言った。

▲手作りの自宅前で、神夫妻

石釜でこだわりのパンを焼く

『JIN』神さん夫妻（北海道真狩村）

●地域の人に親しまれて

ニセコ町の東部、羊蹄山の麓に広がる真狩村。畑と農家が点在する農村地帯の一角に真新しい木造の瀟洒な家があり、「JIN」という小さな看板を掲げたパン屋さんがあった。

「とてもおいしいパンを焼いている」と案内してくれたのは矢吹理香さん。ドアを開けると、木製のお洒落なカウンターと棚があり、焼きたてのパンが並んでいる。我々がよく見かけるいろいろなモノを加えた盛り沢山の種類を並べているパンではなく、小麦や素材のもつナチュラーな生地を石釜でやさしく焼いた感じが判るシンプルで清楚感あふれるパンが大小10種ほど置かれている。

「いらっしゃいませ」と迎えてくれたのは、

▲石釜で焼いたパンが並ぶ店頭

▼心を込めて焼いたパンは作品のように並べて…

神さんが手作りしたレンガ造りのパン工房

パンのイメージにぴったり、清楚で品のいい神麻里さん（34）。午後3時を過ぎていたため数が少なくなっているようだが、矢吹さんは「好きな田舎パンがまだありました」といって、大きな田舎パンの切り身を買い求めて帰っていった。つづいて軽トラックで中年の男性が、赤い車で若い女性らがやってきて、それぞれ何種類か買い求めていく。「ごめんなさい、種類がすくなくなりました」と麻里さんはわびながら、叮嚀に包装して手渡す。

「何のPRもしていないのですが、おかげさまで地域の方がよく利用してくれています」

「JIN」のパンは、真狩のフランス料理店でも利用されて好評だが、農家の人が野良仕事の折に気軽に利用してほしい、それが神さん夫妻の願いである。

ご主人の幸紀さん（31）が隣接するパン工房から作業着姿で戻った。

目の前にあるレンガの建物がパンを焼く場所で、軒下には沢山の薪が積んである。

「明日は休みでもあるので、もう火を落としてしまったんですが」といって案内してくれた。レンガを二層に積み上げた釜で、下の釜で薪を炊いて500度まで熱したら火を止め、その熱で上の釜に並べたパンが焼ける。火を止めても釜は24時間常に100度を保つようにしてあり、工房の中は暖かい。

「フランスパン風なものをここの風土に合わせて作りたいと思いました。薪を炊いて石釜で焼くと、生地の中はしっとりとみずみずしいのに表面はパリっと香ばしく焼けて、小麦の風味や中に入れた材料の味が引き立って来ます」

朝6時に釜に火を入れて徐々に焼き、店は9時にオープンする。一度に沢山は焼けない上に、一回焼くのに1時間以上かかるので、量産ができない。だからこそ美味しい限定品として人気を呼んでいるのだろう。

●家もパン工房も手作りで

神幸紀さんは北海道生まれで、麻里さんは横浜生まれ。ふたりは真狩のホテルのフランス料理店で働いていて知り合った。神さんはフランス料理に欠かせないフランスパンに興味を持ち、勉強を始めた。本場パリへも見学に行き、石釜にこだわって焼こうと決心した。自分で工房を設計、石釜用の耐火レンガ、薪を炊く釜は愛知県から取り寄せて、試行錯誤をしながら組み立てた。精密に美しく仕上がり、よく手入れされている。

同時に住まい&作業場のある一戸建て家屋も手作りしてしまったというから凄い。

「ガレージハウス風の組立キットがあるんです。基礎工事は専門の大工さんに頼みましたが、あとは殆どを私が作り、内装は奥さんが担当しました」

土地は、農家が好きなだけ使っていいと提供してくれた借地。桜川地区の幹線道路に面している景観のいい場所だが、観光客のコースにはなっていない。春になると家の前の花壇に草花が美しく咲く予定だ。

ふたりには生後10カ月の男の子がいて、我々が訪ねた時はお昼寝していた。

明日から二日間は店は休みとなる。しかし一日は材料の手配や生地づくりで忙しいという。

真狩の小学校から、学校給食用のパンを焼いてくれないかという話もきており、神さんの次への挑戦が始まる。

美味しい手作りパンを作るというこだわりを頑固なまでに守りながら、自分達の夢を一歩一歩実現している神夫妻、ニセコへ来る時はまたぜひ寄ってみたいと思った。

車の中で「JIN」で買い求めたパンをいただいたが、表面のパリっとした質感としっとりと密度の濃い中身が歯ざわりよく、懐かしい味が口の中で広がった。

・Boulangerie「JIN」☎0136-45-2773

椅子や机の知的家具で甦った廃校
二人の木工家が探し求めた夢の工房
『湯ノ里デスク』（北海道蘭越（らんこしちょう）町）

▲田代さん(左)と佐々木さん。旧小学校の黒板やストーブも大事に使っている

●家具職人で田舎暮しを実現する

ニセコの代表的温泉郷として知られる昆布温泉から車で約5分、ニセコの山々の中腹に位置する湯里に、旧湯里小学校がある。木々が茂り小川が流れ、池では川魚が跳ねるような懐かしい風景の中に、赤いトタン屋根のこじんまりした可愛らしい学舎が建っている。

明治30年代に大豆や小豆栽培をする開拓地として17戸が入植、40年に第五南尻別尋常小学校湯山別特別教授所として開校した小学校で、大正時代には平均児童60名、昭和40年以降は30名足らずとなったが、愛鳥モデル校、環境教育モデル校等に指定され、特色ある取り組みが行われて来た。平成14年3月末でついに閉校することになったが、その話を聞き、その後の利用を申し出たのが田代信太郎さん（38）と佐々木武さん（39）だった。

当時二人は旭川に近い東川町の家具工房で働いていたが、独立して工房を作りたい、体育館や広い教室のある廃校こそが理想の場所、お気に入りのニセコエリアに廃校はないだろうかと探していた。

当時11人の児童が通う湯里小学校が近々廃校になると聞いて、湯里小学校がすっかり気に入った二人は、ことあるごとに蘭越町に通い、町と根気強く交渉し、利用許可をもらった。閉校して間もない14年の6月、夫婦4人と子ども5人の家族たちと共に引っ越して来た。住まいは脇に建つ教員住宅で、子どもたちは蘭越小学校へ通い、奥さんたちもキャリアを生かした仕事を得て共働きしている。

▲いまは空室で倉庫になっている湯里小学校の別棟

「廃校になって間もなく移住して来たので校舎はきれいでした。残っていた椅子やテーブル等も生かし、子どもたちの絵やポスターなどもそのまま展示しています。家は教員住宅を借りており、私の家は元校長先生の住宅で、こちらも大変快適です」と田代さんは言う。

田代さん、佐々木さんは東京出身。田代さんは東京の書店に勤務していたが、田舎暮らしを実現したいと思うようになり、そのためには技術が必要だと岐阜県にあるオークビレッジ「森林たくみ塾」に入社して家具作りの基礎を学んだ。佐々木さんは東京の写真ライブラリーに勤務していたが、同様に家具職人を

▲机や椅子、文具作品が並ぶ「湯ノ里デスク」のショールーム

▼教員室だった部屋は設計や休憩室に活用

めざして長野県の技術専門校で一年間学んだ。二人が出会ったのは、修業先として入社した北海道東川町の家具工房「北の住まい設計社」だった。

●レトロでモダンな知的空間

昔ながらの玄関、下駄箱、廊下を懐かしく見ながら入口に近い教室に入っていくと、そこは机や椅子、本箱、本のフレーム、ブックスタンド、小物などの文具作品が並ぶ「湯ノ里デスク」のショールームになっていた。無垢材という木の良さを生かしたシンプルでセンスのよい木工品の数々が日溜まりでおしゃべりしているような雰囲気で配置され、広い教室は知的空間にあふれている。そんな中に混じって置かれた古い机や椅子、だるまストーブなどが、シャープな木工品の現代的感覚をレトロ感覚で中和する独特の雰囲気を作り上げている。

「子どもの声は消えても、代わりに温かみのある木工家具をつくり出す音が校舎から聞こえてくる、ここへ来ると本や机椅子に出会える。そんな思いから工房の名前を,デスク“としたんです」

隣の職員室は設計したり休憩する場に、奥の体育館は木材や工具、工作機器がゆったり配置され、どこも磨き上げられて大切に使われている感じだ。静かに流れているモダンジャズがよく似合う。

木工品の材料はイタヤカエデ、ミズナラ、ウォルナットといった無垢材で、組立は釘などを一切使わない伝統的なほぞ組み技法。丁寧に磨き上げて木の質感を陶器の肌のように仕上げ、無色・無害の植物性オイルで塗装する。「アートではなく、丈夫で長く使える実用品をめざしています」と二人は言う。

ショールームにはデスク関係の作品が多く置かれ、家具は注文で制作しているとのこと。先に取材したパン工房「JIN」のカウンターテーブルは田代さん達の制作で目をひいたが、昆布温泉のホテル「甘露の森」は家具から什器まですべてを「湯ノ里デスク」の作品を採用しているので、宿泊客が見学に来ることが多いという。

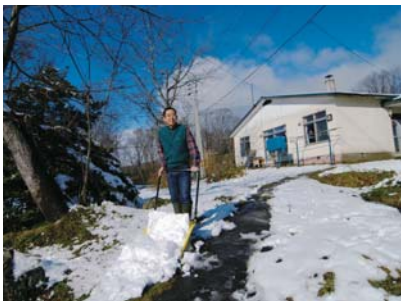
本のフレーム、小物入れ、ペン立て等、アイデアに富んだ文具作品

午後、太陽が顔を出し、昨夜降った雪が溶け出した。田代さんは子供達が帰ってくるまでにと雪かきをはじめた。校舎は「湯ノ里デスク」が借りている建物の奥にモルタルの別棟校舎があり、広い校庭をはさんで教員住宅があったところは新築した町営住宅が数棟建つ。「いまではここは、若い世代が暮らし交流する賑やかな地区になりました。地域の人が何かと助けてくれますし、ここの卒業生たちも遊びにきてくれます。皆のかけがえのないふるさとです。我々も年とってじいさんになってもここで木工づくりを続けているでしょうね」と田代さんは愉しそうに語った。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

・WOOD WORK「湯ノ里デスク」
☎090-2054-5683

木工品を製作する体育館



雪かきをする田代さん。後ろが教員住宅だった住まい。改装して町営住宅として人気の家々（右）

和歌山県へ交流居住

カヌーの手入れをする福山さん夫妻。右は二人がカヌーを楽しむ日高川

カヌーを通じて本格的田舎暮らしへ

移住に向けて準備中　福山さん夫妻（和歌山県日高川町中津）

学生時代からボート、山歩きをしてきた福山さん夫妻は、日高川へカヌーに通ううちに旧中津村の自然や人々に魅せられ、ついに一戸建ての家を新築、畑仕事にも精出すようになった。大阪での仕事と両立しながら毎週末に阪南市から来町、リタイアと同時に移住したいと準備をはじめている。

日高川町（川辺町、美山村、中津村が平成17年5月に合併）へは、和歌山県が推進している「緑の雇用」を取材するため、2年前に来ている。今回の「交流居住」特集でも「日本の森林を育てる」（26号）と同様に、和歌山県緑の雇用推進局が手配してくれ、当日は休日にもかかわらず、県の新ふるさと推進課出口博之さんと定住促進課初山守さんがご一緒した。大変熱心で意欲的な職員がいる県である。

中津支所産業振興課山下泰三副課長のご案内で、週末には殆ど中津に来ているという福山敏博さん（55）由美子さん（54）夫妻の新居へ向かった。

10数年まえから日高川へカヌーに

日高川の上の方の林の中に町が宅地整備して販売した分譲地20区画があり、奥まった一角に木肌を生かした2階建て木造住宅が建っている。庭先でカヌーの手入れなどしながら福山さん夫妻が待っていてくれた。庭にはロード用の4WD乗用車と軽乗用車が駐車してある。

「四駆はここへ置いておき、阪南市から来る時は燃費の安い軽乗用車を利用しています。高速を使えば1時間で来れて、こんなに豊かな自然がある。だからほぼ毎週来ています」と敏博さん。

敏博さんは阪南市で助役という要職にあり多忙な毎日。都市計画の企画業務に関わり、ニュータウン開発を手がけて来たが、自然環境を生かし緑地をどう取り入れていくかを重視してきた。助役さんと聞いて少し畏まって来たのだが、会ってみるとスポーツ好きの気さくな青年といった感じ。由美子さんもラフな装いがぴったりのお似合いカップルだが、普段は高齢者の介護ボランティア活動や趣味の絵画、手芸教室の指導等で忙しい日々を送っているようだ。

「中津へは日高川でキャンプ、カヌーをやるために、もう12、13年前から来ています。変化に富んだ川で周辺の景色も抜群です。川は中津で大きく蛇行し、中程に川辺に車をとめてキャンプやバーベキューを楽しめる親水広場があります。キャンプ場の隣にはレストランと温泉（中津温泉あやめの湯鳴滝）もあるので重宝してきました」

敏博さんは高校、大学時代からボートをやり琵琶湖での大会等に出場した本格派。阪南市に勤めるようになってからは個人でも楽しめるカヌーに打ち込むと共に、仲間達と「カヌー隊」「鮎釣り隊」などのグループを結成しリーダーとして活動している。この家は仲間とのスポーツ活動の拠点であり、ふたりがカヌーの他に野菜づくりや散策等、もうひとつの生活を楽しみ明日への鋭気を養ういやし

木の香溢れる居間。上はキッチン

の場所になっているようだ。

「家は当初、山の中にいい場所があったのでログハウスを建築しようと準備したのですが、役場の人に上下水道が完備した分譲地を紹介され、4年前にここの土地を購入（80坪、坪6万円）し、地元の建設会社に頼んで、地元の間伐材を使った家を建てました。予算の制約があったのか、もう少しいい木を使いたかったと残念ですが、いずれ改装するのを楽しみにします」と言って中へ案内してくれた。

木の香りがする20帖ほどの居間に棚などを上手に配した使いやすい台所、奥に寝室。吹き抜けになった高い天井と広い窓が開放的で、カントリーライフを楽しむもうひとつの家という雰囲気にあふれている。2階ロフトには2間あり、友人がきて勝手に利用しているようだ。前庭も広いが、西側にある雑木林との境に数本栗の木を植えた他は空き地のまま。前に建つ家のご主人が丹生こめて畑を作り木を植えているせいもあるが、別の場所にかなり広大な野菜畑を借りているため。雑木林のある庭の隅に野天風呂を作るのが近々のテーマだという。

「普段家では何も作りませんが、ここへ来ると料理は主人がやってくれます。学生時代から山や川を巡って野外生活を趣味にして来ましたので、料理を作るのも好きなんです。私はパンなど焼いて、ご近所に届けたりしています」と由美子さん。家の内装は由美子さんが中心に行い、センスのよい近作が控えめに飾られていた。

休耕田を借りて野菜作り

福山さんが農地として借りている場所へ案内してもらった。日高川沿いの水田地帯で、休耕田を市民農園として貸出したもので、480㎡以上ある。インゲン、トマト、なす、きゅうり、カボチャ、白菜、キャベツ、ねぎ等何でも作り、手入れも行き届いている。

「最初は粘土質の田んぼだったので腐葉土とオルトテン（防虫剤）を入れてよく耕しました。後は特に何もしませんがよく育つようになりました。でも虫との闘いで、虫よけに防虫ネットを設置したりマルチ栽培などもして苦労しています。農家の苦労がよく判るようになりましたね」と由美子さんは言う。農園使用料は年間5600円かかる。

ふたりは仕事を終えた金曜日の夕方6時に阪南を出て中津の家に来る。翌土曜日は朝7時頃には畑へ出て働くそうで、「中津でごろんと昼寝三昧と思っていたのですが、とんでもない。手入れすると植物はそれに答えてくれますから、最近は欲が出てまっ先に畑へ来ます」と敏博さんも苦笑。

一方、4WDの愛車にはコールマンの自慢のテント、寝袋、輪行車（自転車）、カヌー等を積み込んでいて、いつでもカヌーや自然散策に出発できるようにしてある。

「中津が中継所になったので、最近は本宮周辺へよく出かけ熊野川を下ります。いずれ仕事をリタイアしたらここへ移住する予定です。そのためにこれからはもっと地域の住民とつきあっていく機会を増やします」と敏博さん。由美子さんも「ここでも介護やお母さんの趣味活動を手伝いそうだから、ますます忙しくなりそうですね」と言っていた。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

・日高川町中津支所産業振興課
☎0738-54-0321

山のてっぺんに理想郷を作る

田舎大好き母さんの挑戦　福島妙子さんと仲間達（和歌山県美里町）

紀伊の山里の集落、その段々畑のてっぺんにある古い民家が気に入って購入した「田舎大好き母さん」福島妙子さん。大阪で仕事のあるご主人を残して一人で移住した。ご主人も毎週末に訪れ、二人の娘や友だちもよくやってくるようになり、連日庭先に出没したイノシシも逃げ出すほど。越冬準備に忙しい中をお伺いした。

山のてっぺんの家と眼下に広がる風景（右）

風呂作りを手伝いにきた藤井さんと福島さん

真国川、貴志川沿いに広がる山里

美里町は阪和自動車道・海南ＩＣから15㎞の位置にありながら、懐かしい田舎の風情を色濃く残している山村。貴志川に沿って東に登ると高野街道、海沿いに出て下れば熊野古道に至る中間部で歴史と自然の豊かな里である。町の主な公共施設や二つの温泉、天文台等は貴志川のある国道３７０号沿いにあるのだが、北部にも山をはさんで真国川沿いに幾つかの集落がある。雨模様のせいか、川から湧いた霧が家や山々を覆うように流れている。廃校があり、清流沿いの道を上っていくと円明寺という集落に出た。さらに川を渡り坂道を登っていくと、段々畑が天まで続くような斜面のてっぺんに家があった。

「いらっしゃい」と家の前へ出て元気に出迎えてくれたのは福島文孝さん（51）と妙子さん（52）。

家の前から眼下を見ると、いま辿って来た集落が下の方にあり、紀伊の山々が西の方に連なっている。すごい絶景だ。「標高４００ｍ、この辺りでは天文台を設置した山と同じ位ですね。下で霧が発生して上がってくるの。裏は森だから暖かく、陽も一日中照っていてとても住み良いところ。川沿いの家だったら買わなかったけど、ここならすぐにでも住みたいと思った」と妙子さんは言う。

家はかなり大きくて立派な平屋建て。「築80年の家で、この土地にこの家を建てた農家の老人が大切にした家。いまでは手に入らない立派な木材を使っています。それが偲ばれて私はこの家に惚れたんです」

家は老人が亡くなってから息子の甥が住んでいたが移住してしまい、そのあと大阪府和泉市の人が別荘として購入した。８帖の和室が５室ある純日本家屋だった家に、元家畜小屋だったところに台所を作ったり、奥に洋間の離れなどを増築して12～13年利用していた家で、家具や調度品も含めて売りにだされた。

美里のこの空家のことを知人の農家から知った妙子さんは心が動いた。景色はいいし古い日本家屋も気に入った、家の他に広大な山と畑があり、いまも柿やハッサクが実り、土地は併せると１町歩にもなる。しかし風呂がなく上水道も自分で設置する必要があり、屋根も雨漏りするらしい。金額的にも高くて一時はあきらめたが、ご主人が「買わないと後悔するよ」と購入を進めてくれた。

文孝さんは特殊運転免許を持ち大阪の建設

遊びに来た友だちとキッチンで

イノシシ捕獲のために親しい農家の人たちがやってきた

家の周囲にたわわに実る
柿を手に、福島さん夫妻

会社で働いている。妙子さんは福島県生まれ。大阪で仲間と無農薬の会をやり役員として農家へも出かける内に、自分も田舎で暮らして新鮮で安心できる野菜を作りたいと思うようになった。どこでも役立てるようにとヘルパーの資格を取り、49歳で車の免許も取得した。農家へ出かけて野菜や田んぼ作りも学んだ。そんな奥さんを見たらご主人は放っておけない。

「僕は博多生まれ大阪育ちだから町の人間、田舎には興味がなかったんです。女房がそんなに一生懸命なら、金は俺がだすよということになったんです」「結婚25年のプレゼントですかね」と妙子さんは照れる。

最終的に700万円で購入できた。家の修理に出費は多いが、ご主人は毎週来るし、二人の娘達も大喜びしてボーイフレンドと出かけてきては手伝いもしてくれる。

妙子さんはすでに昨年10月に住民票を美里に移して、ひとり暮らしをはじめた。夜は怖くないかと聞くと「怖いのは町の人だけ。イノシシやサルなどもいるけど、動物は人は襲わないでしょ。近くにはお年寄り世帯だけれど農家が4戸あって相談にのってくれるし、藤井ますのすけさん（役場勤務）のように何でも出来て、家まで建ててしまった達人が近くにいるので、安心です」

この家を買った時、妙子さんは庭先に銀木犀と冬咲き桜の苗木を植えた。畑にはこの辺の農家の副収入になっている柿やハッサク、南紅梅の老木が沢山ある。家の整備が終ったら畑仕事も待っている。いずれ娘達が孫達とこの家に来るころには、花も実もある素晴らしい家屋敷になっているだろう。妙子さんならできる。地域の人々もきっと茶飲みに上がってきて賑やかな家になるだろうと思いながら、坂道を下った。

Iターンして家も川魚養殖池も手作り――藤井さん

福島さんの家で風呂場作りを手伝っていた藤井ますのすけさん（52）の家は福島さんの家から車で10分ほど下った清流の脇にある。

藤井さんは12年前に名古屋市の勤めをやめて美里へIターンした。ここは奥さん・牧子さんのふるさとで、いまは藤井さんのお母さんと3人暮らし。近くに空家を借りて住み、町役場に嘱託で勤務しながら念願の家作りを始めた。川に近いので湿気も多いからと極太の丸太を購入（アメリカ産）、皮をはいで組み上げていく。土台も鉄骨部分や鉄板の階段、窓や椅子等もすべて手作り。危険な一人作業のため何度か「死に損なった」という。厚い木を配した家の中は暖かく湿気もない。ダイニングのセンスのよいテーブル、各所に気取ったライティング、小窓とデスク、収納ケース、吹き抜けの広い居間、窓からは清流が見える。ゆったりした階段を登ると寝室や収納庫、書斎があり、この部分がまだ完成していないとか。何しろプロも顔負けの素晴らしい家で、センスのよさと高い技術力に驚くばかり。

円明寺地区には人を呼べる観光的施設がないため藤井さんは川沿いにアマゴやニジマスの養殖池まで作ってしまった。川の清流を引き込んだ池ではアマゴ達が元気に泳ぎ、釣った魚を焼いて食べるバーベキュー施設やテーブルも用意されている。少しは客がくるの？と聞くと「PRしてないのでさっぱりです」とけろりと答える。

「町でも空家の貸し出しやIターンの受け入れ、農業支援等に力を入れていますので、私がキーマンになって手伝えるならと思っています」と語っていた。

文／浅井登美子　カメラ／小林恵

藤井さんの池を見学する和歌山県緑の雇用推進局出口、初山さん

藤井さん夫妻と手作りログハウス

・美里町観光協会☎073-495-2188
（4月より合併して紀美野町になる）

技術を身につけて田舎暮らしの準備

木工芸家をめざして木曽へ居住

上松技術専門校で学ぶ若者たち（長野県上松（あげまつまち）町）

▲30名が作品作りに励む木工科の実習室

▲上松技術専門校の校舎、実習棟

▲機械室で製材する訓練生

▲チェア作りをする高林悠久さん

▲木材工芸科で作品作りをする阪本善裕さん（左）と角田遥子さん

田舎暮しに憧れる若者は多いが、山間地で経済的にも安定して食べていくことは難しい。しかし技術や経験、やる気があれば何とかなる。田舎の人たちもそんな若者が来てくれることを望み、県や市町村、地域も研修や体験できる場を各種設けて支援している。
今回は、大工や木工芸職人をめざす人たちに人気の信州・木曽の技術専門学校と、農業技術を現場で研修する若者を和歌山県で取材した。

●木曽は伝統工芸品の里

長野県には技能労働に必要な基礎技術と知識を習得するために県が設置・運営している専門学校が7校あり、上松校は訓練期間1年で、木工科（30名）と木材工芸科（10名）を開設している。長野、松本校などが電機や自動車、コンピュータ関連学科が中心であるのに対して、上松校は木製家具や小木工品の技術習得を中心にした専門校としての特色が生かされてきた。

木曽は徳川幕府直轄の御用林としての歴史を持ち、木材の集積地であり銘木の産地。日本有数の伝統木工芸の里として知られ、上松技術専門校は昭和21年に開校し、木工芸をめざす人たちを多数育ててきた。

同校は平成10年の「伝統工芸品に学ぶ」特集の時に取材させていただいた。その時はインテリア科や総合専修科もあり、60名が学び、訪ねた6月は新学期から3ヵ月目で、基礎講座を受けるグループがいる一方で、機械を使って精度の高い木工品を製作する2年目の生徒もいた。現在は41名が学び、広い校内の実習室は整理整頓され、緊張感のある雰囲気の中で、生徒達は作品作りに熱中していた。

安納五十雄校長は「木工に伝統を持つ木曽の風土の中でこの学校は大勢の工芸技術者を育てて来たという実績と伝統があります。最近は厳しい県財政を反映して、授業料も取り、いままでのように夜遅くまで実習したり土日も開校して自由に出入りできる校風は廃止し、普通の専門校並みになりました。実際のモノ作りでは時間内に完成させることは難しいので、先生のボランティアで融通しています。

ただ最近は、木工作家に憧れて軽い気持で入学してくる若者も増えています。一人前の職人になるには10年はかかります。企業も雇ってから3～4年かけて育てる必要があるため、学校を出ても就職先を探すのは結構大変です。要は、本人の

木材工芸科・角田さん製作の鉢

木曽の風土の中で大勢の技術者を育てて来たと語る安納校長

やる気と、木を育てる自然や木材作業に従事している人々への感謝、木工に対する強い関心ではないかと思います」と語る。

かつては無料だった授業料は年11万5200円となり、作業服や教材費等の経費が約10万円、寮に入ると月約5万円（個室付き、訓練日の3食付き）かかる。他県の同様の専門校ではまだ授業料が無料というところが多いが、それでも上松校には毎年2倍近く応募があり、入学には基礎学科テストも行われる。しかも入学者の半数の20名は大学卒で県外から移住してきた人。一度企業等に勤め、辞めて来る人たちで、意欲的に学んでいる。

森下勝次副参事の案内で実習棟へ行った。実習棟は約1500㎡あり、丸のこ盤や自動かんな盤等が並ぶ機械室の奥に木工科、木材工芸科がある。年齢的には29歳以下が25人、30～44歳が14人と全体的に若く、女性も9人在校している。

「本校で使用する木は、広葉樹などの硬い木で、スギやヒノキはあまり使いません。原則として最初はノミやカンナ、ノコギリを使って手作りすることを練習し、2作3作目あたりから機械も使いながら大作に取り組んでいきます」

高林悠久（はるひさ）さん（28）はクルミの木でチェアを製作していた。一本一本の木を手間ひまかけて形成し磨き上げて組み合わせるもので、バランスと安定感を図るのがポイントだという。最初は小物を入れる整理箱を2種製作し、文机や座卓等の中型家具の製作を経て、チェアは4作目に当たる。

隣ではダイニングテーブルを製作する高野山恵美さん（24）がいる。千葉県から来た。

高林さんは大阪市出身、東京の家具を修理する会社で働いていた。「ヨーロッパのアンティックな家具は手入れされながら大切に使われている。自分も基本的なことから勉強しよう、知り合いに上松校で学んだ人がいたので当校に決めました」

結婚しているため、奥さんも移住して来て、隣の木曽福島町に家を借りて住んでいる。

木材工芸科では小木を使った加工を学んだ後、ロクロ実習し、お盆や銘々皿などを製作していく。入口近くで阪本善裕さん（28）が鎌倉彫をしている。奈良市東大寺近くの生まれだが、東京のテレビ局でディレクター・アシスタントの仕事をしてきた。

「毎日人と接する忙しい仕事でした。今後どうするかは未定ですが、いまは黙々とモノ作りに専念したいと思っています」という。

隣では角田遥子さん（23）がトチの木を使って個性的な菓子鉢を製作している。栃木県出身で金沢美術大学を卒業して上松校へ入学した。「木曽の伝統工芸に関心がありました。将来は漆もやりたいと思っています」

ノミを使っての細かな作業、目が充血している。

木材工芸科では木彫り、くりもの製作、竹細工のあと漆仕上げを学び、卒業製作には文机や膳等の応用品を製作する。

▲現在30名が入所している寄宿舎

●雇用保険を利用して研修中も自活

実習棟の奥に鉄筋3階建ての寄宿舎がある。6帖の畳部屋に1帖程の板の間がついた個室で、現在30名が入所している。

小奇麗な食堂で夕食の準備をしている寮母さんに聞くと「3食付きで、ご飯も味噌汁もお代わり自由。みんなたべっぷりいいよ」と言う。ちなみに本日の献立は、鶏の唐揚げ、大根とサバの煮つけ。夜食用のおやつにドーナツもつく。「ここの生徒はとても真面目で、よく勉強しています。寮は自主運営しているけど問題が生じたことは一度もないね」と言っていた。

午後4時に授業が終了。お願いして高林さんの借りているという借家を拝見させていただくことになった。車で約20分、木曽福島町の賑やかな市街地から入ったところに一戸建て住宅が10棟ほど並んでいて、その一つを借りている。

奥さんの高林良子さん（28）も東京での勤めを辞めて一緒に来た。町のパン屋さんでパートで働いていたが今は辞めているという良子さんは「雑貨の店に勤めていました。将来は二人で木工製品を中心にした木の香りが溢

◀高林さん夫妻が下宿している一戸建て住宅の前で

れる店を出すのが夢です」という。

この家は建設省関係者の社宅だったようで、築60年。毎年上松専門校で学ぶ人が借りていて、家賃は2万5000円。6帖間2つの和室に3帖の収納室、小さいキッチンと広めの庭があり、一部屋は木工品製作用に使っている。

「1年間専門校で技術習得する場合は雇用保険が支給されますので、贅沢をしなければ学費も含めて充分生活していけます。そういう人たちが多数入学しています」と高林さん。

高林さんは、卒業後は長野県高遠町の木工店に就職が決まった。

「先日二人で見に行ってきたのですが、同じ長野県でも木曽山脈をはさんで東側の伊那地方は広々として活気がありますね。高遠は城下町で古い街並みを保存しており、就職する場所としては申し分なさそうです」と明るく語った。

学校には生徒の作品の一部を展示するコーナーがあり、労働大臣賞等を受賞した見事な作品が並んでいる。安納校長は、「生徒の作った作品は機会あるごとに出展して、数々の賞を受賞しています。松本市で開催するクラフト展には"勉強中の木工屋です"といって出展、今年は18人の作品を展示しました。発表や受賞は励みになりますからね。ここを卒業しても恰好の就職口がなく元の職場に戻る生徒もいますが、木工を諦めないで続けていって欲しい、いつかは必ず活かせると私は思っています」と語っていた。

文／浅井登美子　カメラ／井上進

・長野県上松技術専門校☎0264-52-3330
http://www.pref.nagano.jp/xsyakai/agegisen/

農家で農業を研修する

（和歌山県日高川町中津）

研修生・鎌田さん（中央）とイチゴ苗栽培をする龍田さん夫妻

日高川町中津地区は大阪ユニチカと提携した「企業の森」を県で始めて開設したところで、「企業の森」はその後県内に10カ所も誕生し、都市と山村の交流事業としても成果を上げている。また、日高川町は備長炭の生産量日本一として知られ、「製炭研修所」を設けて、毎年製炭技術研修生を1～2名受入れ、1年間の研修後は皆備長炭職人として就労している。

そんな中津地区に、新しく農業を始めたいと研修にきている若者達がいるというので産業振興課山下泰三さんの案内で訪ねてみた。和歌山県では就農支援事業として市町村や農家と協力して研修生の受入れに力を入れており、中津地区には若者7人が来て農家で実習をしていた。

訪ねた農家はハウスでイチゴ苗栽培をする龍田雅人さん（46）と奥さんの悦子さん。その日は研修生の一人、鎌田佐和子さん（30）が作業中だった。

鎌田さんは神戸市須磨区の出身だが、高校時代から農業に憧れて、水戸市の農業学校・日本農業実践学園を卒業。和歌山県が就農支援事業をしていることを知り、申し込んだ。中津地区に研修にきている7名の内、鎌田さんの他にもうひとり女性がいる。10月中旬に来て今年3月まで、6ヵ月間研修する。

「農家13軒が研修生の受け入れに協力しており、研修生は梅・柿・みかん、野菜や花卉の有機栽培等を各農家を廻って実習します。私の家は県の農業試験所の委託を受けて、ポットで苗を育てて根を張らせるというイチゴの親株の育成をしています」と龍田さんから説明を受ける。

「現場で専門的なことが学べてとても勉強になります。6ヵ月では短いので、あと半年か一年は実習したいほど。卒業後も雇ってくれる農家があればいいんですが」と鎌田さん。昨日はウスイエンドウ栽培を研修した。

研修生は、廃校になった旧高津尾小学校の校舎を宿舎にしており、食事も自分達で当番を決めて作っている。校舎は広すぎて落ち着かず冬は燃費もかかるので、空き農家を寮として借りるか、この事業が定着したら研修センターを建築することも検討してはどうかと山下さんは言う。研修生には県と農家が折半で出し合って、1日3000円が支給される。

なお和歌山県就農支援センターは御坊市にあり、1～5日間の農業体験、月5日間で8ヵ月学ぶ技術修得、6ヵ月間の農家実践研修を主催している。センター内には温州みかん等の果樹園、野菜や花卉等を栽培する普通畑、施設栽培の農場があり、農家実践研修を除いてセンターの農園で就農研修を行なっている。

研修生が宿舎として活用している旧高津尾小学校前で、産業振興課山下さん

・和歌山県就農支援センター
☎0738-23-3488

各地のクラインガルテン

滞在型市民農園

クラインガルテンを最初に設置して話題になった坊主山クラインガルテン

クラインガルテンは農園付きで宿泊・休憩施設（ラウベ）がある施設で、概ね管轄の市町村が設立し、管理運営を市民農園のある地域の農家組合や第三セクターが行っている。原則として月数回は利用し、農園も放置せず有機栽培をするようにという規約を設けているが、野菜栽培等では農家が指導してくれたり、地域や利用者との行事もいろいろある。

●栗沢クラインガルテン

所在地／北海道空知郡栗沢町由良
区画／27区画
1区画の面積／約300㎡（ラウベ約21㎡4タイプ、菜園約120㎡）
利用期間／4月から翌年3月、1年単位の更新で最長10年間継続使用可能
利用料／年間24万円(光熱水費別＝以下同様)
問い合わせ☎0126-34-2150

●不動尊クラインガルテン

所在地／宮城県伊具郡丸森町滝西35-5
問い合わせ☎0224-73-1150管理組合
（詳しくは19頁参照）

●筆甫（ひっぽ）クラインガルテン

所在地／宮城県伊具郡丸森町筆甫中下30
問い合わせ☎0224-76-2230管理組合
☎0224-72-3026丸森町観光課
（詳しくは19頁参照）

●倉淵村クラインガルテン

所在地／高崎市倉淵町水沼相間平27
農園と休憩・宿泊施設は別の場所にあり、農園使用者以外でも宿泊や入館は自由。
ふれあい館宿泊料／一般大人6,825円、小人4,725円
入館料／一般3時間500円、小人250円
農園使用料／1区画約40㎡が年間8,400円
問い合わせ☎027-378-3834

●高根クラインガルテン

所在地／山梨県北杜市高根町蔵原1655
農園の中に簡易宿泊施設（ラウベ、コテージ）がある。利用者は1泊～数日宿泊して、農園作業をしながら家族やグループで宿泊できる。
農園／1区画150㎡が150区画あり。
入会金1万円、年間利用料1万円
ラウベ／5人用3棟　宿泊8,400円、休憩3,150円
コテージ／5人用7棟　料金は同上
問い合わせ☎0511-20-7211

●緑ヶ丘クラインガルテン

所在地／松本市四賀字中川1747
区画／78区画
1区画の面積／270～300㎡（ラウベ約30㎡、菜園約100㎡）
利用期間／4月から翌年3月、1年単位で更新し最長5年間継続利用可能
利用料／年間36万円～39万円
問い合わせ☎0263-64-3111市役所

●坊主山クラインガルテン

所在地／松本市四賀取手481
区画／52区画
1区画の面積／270～300㎡（ラウベ約27㎡、菜園100～120㎡）
利用期間／4月から翌年3月、1年単位で更新し最長5年間継続利用可能
利用料／年間10万円～25万円
問い合わせ☎0263-64-3111市役所

●クラインガルテン曽爾

所在地／奈良県宇陀郡曽爾村小長尾
問い合わせ☎0745-98-2111
（詳しくは12頁参照）

●朝来クラインガルテン

所在地／兵庫県朝来市山内字山田垣373
区画／25区画
1区画の面積／184～391㎡（ラウベ32～54㎡）
利用期間／4月から翌年3月、1年単位の更新で最長5年間継続使用可能
利用料／年間362,900～54万円
問い合わせ☎079-678-1125

●志都の里クラインガルテン

所在地／島根県飯石郡飯南町志津見
区画／20区画
区画面積／約300㎡（ラウベ約52㎡、菜園約120㎡）
利用期間／4月から翌年3月、1年単位で更新し最長5年間継続利用可能
利用料／384,000円
問い合わせ☎0854-72-0313

●久万高原クラインガルテン

所在地／愛媛県久万高原町下畑野川甲
マイガーデンタイプ、ログ付きABタイプがあり、ログハウス内には電気、水道、トイレ等はないため、共通施設のトイレや休憩所を利用する。
・マイガーデンタイプ／40区画
　約33㎡の畑地4つの中にシェルター（東屋）2棟付きのものを共同利用する。
　利用料／年間1区画1万円
・ログハウスタイプ
Aログハウス約9㎡、デッキ、畑50㎡、駐車場　利用料／年間12万円
Bログハウス約9㎡、畑地約36㎡
　利用料／年間85,000円
問い合わせ☎0892-41-0040

De POLA No.30
［でぽら］2006年春夏号

発行日／平成18年3月5日
発行所／財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001　東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階
☎03-3580-3070　FAX03-3580-3602
http//www.kaso-net.or.jp/
編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい
編集工房アド・エー

平成17年度DVD完成！ 都市と田舎が響きあう―住民どうしの交流をはかる

ブナ北限の里づくり／北海道黒松内町

世界で一番北にあるブナ林で学術的価値が高く、戦時中や戦後に伐採されようとしたが先人達が命がけで守って来た経緯がある。町では昭和63年に「ブナ北限の里づくり構想」を策定、自然体験ツアーを行ったところ都市部から沢山の人が来るようになり、受け皿として森林公園、宿泊施設、自然博物館を開設、国内外の若者や子ども達等を対象に自然体験活動を実践している。特産物づくり,フットパスの発信地としても人気。（約25分）

異文化を体験する／岩手県一関市花泉町

旧花泉町の金沢小学校と東京の市ヶ谷小学校との交流が始まってもう20年。市ヶ谷小の先生が餅米の産地にある金沢小を訪ねたことから、両校で「餅文化と稲作」を共同で教材研究したのが契機で、以後絵や作文の交換、両校をお互いに訪問する交流が始まった。毎年春には花泉の4、5年生が東京へ、夏には東京の子ども達が花泉へ出かけホームステイする。この交流事業は新宿区も協力、最近は区民の参加も多い。（約23.5分）

DePOLA [でぽら] NO.30
平成18年3月5日発行
発行／財団法人過疎地域問題調査会 〒105-001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号 第一天徳ビル3階 S03(3580)3070代

換金には期限があるのに、時は刻々と過ぎていきます。

ご存じですか。宝くじの当せん金の支払いは、
支払い開始日より1年間です。
せっかくの当たりを無にしないよう、
宝くじを買ったらしっかり調べて必ず換金してください。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。